

日本国防衛省航空自衛隊幕僚長田母神俊雄

「懸賞論文：日本は侵略国家であったのか」  
受賞

をめぐる 批評

【まえがき】

この文章は、2008年11月1日からマスコミを大いに騒がせた事件である、航空自衛隊トップの田母神俊雄（たもがみ としお）航空幕僚長（60歳）が、「わが国が侵略国家だったなどというのはまさにぬれぎぬ」などと主張する論文を「民間の懸賞論文」に発表した出来事に関する「一連の報道」を材料にして、筆者がブログに公表した記述を別途、ここに収録したものである。

ブログの記述においては、新しい日付が上部＝後部に重ねられる形式での構成になる。そこで、当初そのように連続物として書いた内容の順序を逆にし、つまり「元の日付」どおりに並べ、これを読んでもらえる形式にしておくのも一案であろうと考え、あえてあらためてここに公表するしだいである。

－ 2008年11月9日－

## 第1幕 「2008. 11. 1」 ■ 時代錯誤の観念論者：航空自衛隊高官 ■

◎ 田母神俊雄 航空幕僚長の「陳腐な文章」◎

### 【過去の亡霊が航空自衛隊高官に乗りうつったその姿】

2008年11月1日早朝、講読している新聞の朝刊を拵げて以下の①に記述する記事を読んだのち、さらにパソコンをのぞいてすでに深夜に配信されていた「該当のインターネット版ニュース」も読んでみた。そこには、つぎのように報じられていた。まず『東京新聞』（インターネット版：2008年11月1日03時37分）を参照してみる。

#### ① 田母神俊雄「論文」の受賞

★「空自トップを解任 論文で日中戦争正当化」★

航空自衛隊トップの田母神俊雄（たもがみ としお）航空幕僚長（60歳：写真は「自宅前で取材に応じる田母神航空幕僚長＝10月31日夜」）が「わが国が侵略国家だったなどというのはまさにぬれぎぬ」などと主張する論文を、民間の懸賞論文で発表したことが〔10月〕31日、分かった。日中戦争を正当化するなど政府見解に反する内容で、浜田靖一防衛相は同日夜に緊急記者会見して「政府見解と明らかに異なる意見で、きわめて不適切。空幕長という職にとどまることは望ましくない」と述べ、空幕長の更迭を表明した（写真は、<http://www.asahi.com/politics/update/1031/TKY200810310298.html> より）。



田母神空幕長は、全国でホテルなどを展開する「アパグループ」（東京都港区）の第1回「真の近現代史観」懸賞論文に応募し、最優秀賞（懸賞金300万円）を受賞した。

――その論文は「日本は侵略国家であったのか」という題で、日本が中国大陸や朝鮮半島に軍を駐留させたのは、すべて条約にもとづくものだったと指摘。日本は「蒋介石により日中戦争に引きずりこまれた被害者」「日本だけが侵略国家だといわれる筋合いもない」「東京裁判はあの戦争の責任をすべて日本に押しつけようとしたもの」などと持論を展開した。

また「日本政府と日本軍の努力によって、現地の人々はそれまでの圧政から解放され、また生活水準も格段に向上した」「多くのアジア諸国が大東亜戦争を肯定的に評価している」と主張した。自衛隊の現状については「領域の警備もできない、集団的自衛権も行使できない」「アメリカに守ってもらうしかない。アメリカに守ってもらえば、日本のアメ

リカ化が加速する」などとのみかたを示した。

浜田防衛相は論文についてこの日初めてしつたといい、「本人としては普段から思っていることを書いたのだと思うが、自分の立場をもう少し重く考えていただきたかった」と苦言を呈した。なお、アパグループは論文をホームページで公開、英訳して世界に向け発信する予定という。

――空幕長は2008年4月、航空自衛隊のイラク空輸活動を違憲とした名古屋高裁判決について「そんなの関係ねえ」と発言し、批判を浴びた。

【侵略に関する政府見解】 1995年8月15日、当時の村山富市首相が「戦後50周年の終戦記念日に当たって」と題する談話を発表。過去の戦争などについて「わが国は遠くない過去の一時期、国策を誤り、植民地支配と侵略によって、アジア諸国の人々に多大の損害と苦痛を与えた」と「侵略」を明確に認め、「痛切な反省と心からのおわびの気持ち」を表明した。その後も日本政府の基本的見解として踏襲されている (<http://www.tokyo-np.co.jp/s/article/2008110190033757.html>)。

## ② 論文というに値する「文章」か？ ―稚拙な一文の中身―

本ブログ「2008.4.20」の「■ イラク空自派遣問題 ■」「◎ イラクへの航空自衛隊輸送機派遣に関する議論の方法 ◎」は、航空自衛隊幕僚長田母神俊雄が、2008年4月18日に下された名古屋高裁（青山邦夫裁判長の）の判決：「イラク空自違憲の判断」に関して、同日の記者会見でこう語っていた点に触れている。

「航空自衛隊がイラクで行っている空輸活動の一部を違憲とした名古屋高裁判決について、『私が（隊員の）心境を代弁すれば、大多数は「そんなの関係ねえ」という状況だ』と、有名お笑いタレントの流行語を引用して語った。

航空自衛隊の最高司令官である航空幕僚長が、敗戦後アメリカ「帝国」の下僕と化した日本国とその防衛省〔庁〕の軍事的に劣勢な立場を憂う発言なのかもしれないが、ずいぶんズサンな議論である。発言の内容は自分の考えに固執した〈きわめて偏狭な見解〉しか提示できていない。



全国でホテル業を展開するアパグループが今回、「真の近現代史観」懸賞論文を募り、この「最優秀藤誠志賞（懸賞金300万円・全国アパホテル巡りご招待券）」を授与されたのが、田母神俊雄の「日本は侵略国家であったのか」という『論文』だったというのである（写真は、[http://www.apahotel.com/topsvoice/topsvoice\\_f.html](http://www.apahotel.com/topsvoice/topsvoice_f.html) より。この女性は「藤 誠志=元谷外志雄」の配偶者。肩書・職名も出ている）。

早速、[http://www.apa.co.jp/book\\_report/](http://www.apa.co.jp/book_report/) に掲載されているその田母神「論文」を一読してみた（ホームページ・アドレスは、[http://www.apa.co.jp/book\\_report/images/2008jyusyou\\_saiyuusyu.pdf](http://www.apa.co.jp/book_report/images/2008jyusyou_saiyuusyu.pdf)）以下の註記。→リンクも貼っておいた）。全部で7千字に満たない、4百字詰め原稿箋に換算すると、わずか17.5枚の分量しかならない「それ」である。この田母神の一文は論文というには拙すぎるし、学術論文というには縁遠いどころか、「これ」を「論文」だと自称するとしたら、まったくおこがましい代物である。通常「論文」というには、形式・内容ともに最低限整えられるべき必要条件があるが、この〈論文〉はその体をなしていない。

要は、戦前におけるお決まりの「大東亜共栄圏」思想の二番煎じというか、せいぜいその亡霊の再来と形容しておけばいい程度であるのが、今回の田母神俊雄「日本は侵略国家であったのか」なる〈文章の内容〉であった。

田母神のような立場に立つ人士たちは、自分たちの気に入らない論説を公表する相手をとらえて「サヨク」〔漢字で左翼とは書かないところが味噌！〕と呼び、なにかとってはひたすら、頭ごなしに非難・排斥する姿勢が濃厚である。これになぞらえていえば、この「田母神の文章」は『単純ウヨク（右翼）』の発想にもとづきながら、太平洋戦争敗戦「体験」を契機に想像・拡大させた〈被害者妄想〉を、それも手短かに要領よく吐露・表現している。

田母神のその文章を一読してみてもおかしく感じた点がある。まず、7点ほどある引用文献の形式においては、著者の氏名と著作の名称、出版社が指摘されているが、発行年、そして引用・参照された「頁（ページ）」が付されていない。つぎに、引用・参照された識者・著作のうち、主に世間に名をはせている氏名を挙げると、黄 文雄・櫻井よし子・渡部昇一・秦 郁彦などが目に付く。これら巷の有名人は「国家国粹主義・単純右翼」寄りの知識人ばかりである。渡部と秦は学者であるが、渡部は田母神の『論文』を最優秀「藤誠志」賞に選んだ審査委員会の委員長であるから、なにをかいわんやである。

うがち過ぎた推測になるかもしれないが、なにか「ヤラセ」的な印象さえ漂わせる雰囲気を感じるのは、筆者だけだろうか？ 田母神の文章はすでに、前段の人士たちなどが十分過ぎるくらい宣伝してきた中身しかみられない。あるいは、渡部昇一も会員である「新しい歴史教科書をつくる会」製作の各種教科書に記述されている内容に相当するものばか

りである。なにゆえ、そのような論著が「〇〇〇賞」の候補に上がり、しかも受賞するのか不可解である。

「真の近現代史観」懸賞論文に応募し、この「最優秀藤誠志賞」に当選する〈秘訣〉も、なんとなく理解できるような気分になれた。独創性・新奇性など不要、論文としての形式的要件とも無縁、執筆分量はなるべく少なめでよく、いままであちこちで繰り返しかえし主張されてきた陳腐な諸説を、ただそのまま適当に組みあわせて論旨を構成すれば、これをもって「〇〇〇賞」を受賞できそうである。これはべつに皮肉を申しているわけではなく、今回の田母神「論文」を一読しての「率直な印象」を述べてみたものである

ともかく、元私立と国立の大学教授で近現代史家、田母神も文献を挙げて引用された秦郁彦は、田母神の一文を読み、「事実誤認だらけ」の「引用」であり「非常に不愉快だ」と反発している〔→つまり、学術的には完全に失格との烙印を押されており、オマケに不快感まで表明されている〕。国際関係論を専攻する白石 隆政策研究大学院大学副学長は、「多くの歴史家がみても奇矯な説を〔軍隊の〕高官が公然と出すということは、日本人がそのように歴史を総括しているとみられてもしかたない」と評言している（『朝日新聞』2008年11月1日朝刊参照。〔 〕内補補足は筆者）。なぜ「奇矯」とまで表される文章に対して、渡部昇一を委員長に戴く「真の近代史観」懸賞論文審査委員会は、賞を与えたのか？

### ③ 経営者の〈虚飾や見栄〉の発揮のために手を貸す学者は誰か？

もつとも、どのような学術論文であっても「一定の思想的・信条的な傾向・偏向」は不可避である。けれども、その作法とはあくまで、学術的な次元において明確に表現し、徹底的に意識しつつ記述してこそ、許容範囲に置かれる態度である。だから、その偏向・傾向は「どこまでも客観的に明視できる論調」で書かれていなければ、とうてい〈学術〉的とはいいがたいと論断される。

そもそも、今回の懸賞論文の〈冠〉に乗っている人物の氏名“藤 誠志”とは、誰か。これは「アパ株式会社（総合都市開発のアパグループ）」の代表取締役社長：元谷外志雄（もとや としお）のペンネームである。



会社経営者が、自分で儲けた金に飽かして、いささか学術的なマントをまとったかのようにもみせたい、それも、自分のペンネームを冠した賞金付きの『〇〇〇賞』をかかげているのである。それは、世論に対する自分の影響力を少しでも発揮させたいかのようにも映る、そしてなによりもあたかも、自身の名誉心を世の中に宣伝させ、満足してみたいかのようにも感じさせる「元谷の気持」を、透視させている（写真は、左が <http://www.jasdfmate.gr.jp/index.html>、右が <http://www.jasdfmate.gr.jp/parts/daihyo.gif>）。

元上智大学教授の渡部昇一といえば、これはもう、日本帝国主義的路線を懐旧してやまないガチガチの国粋主義・国家至上主義者の古代的・化石的な典型的見本と称せる人物である。



この元大学教授が今回、田母神の「論文」と称する「文章」に、懸賞金付きの、それもホテル経営などで成功し、金を貯めこんだ事業者の名誉欲、多分「〇〇賞の創設者である自分」という「私的な感情」＝満足感の実現を具体的に手助けし、高揚させてあげるために、その運営に協力したというわけである（写真は、左が <http://www.watanabe-shoichi.com/>、右が <http://www.jmca.net/booky/watanabe/100top.html>）。

#### ④ 若干の反論

田母神の「文章」は、反論するにはたわいない中身ばかりであるけれども、ここではつぎの1点のみとりあげ議論しておく。

李王朝の最後の殿下である李 垠（イウン）殿下も陸軍士官学校の29期の卒業生である。李 垠殿下は日本に対する人質のような形で10歳の時に日本に来られることになった。しかし日本政府は殿下を王族として丁重に遇し、殿下は学習院で学んだあと陸軍士官学校をご卒業になった。陸軍では陸軍中將に栄進されご活躍された。

この李 垠殿下のお妃となられたのが日本の梨本宮方子（まさこ）妃殿下である。この方は昭和天皇のお妃候補であった高貴なお方である。もし日本政府が李王朝を潰すつもりならこのような高貴な方を李 垠殿下のもとに嫁がせることはなかったであろう。因みに宮内省はお二人のために1930年に新居を建設した。

現在の赤坂プリンスホテル別館である。また清朝最後の皇帝また満州帝国皇帝であった溥 儀（フギ）殿下の弟君である溥 傑（フケツ）殿下のもとに嫁がれたのは、日本の華族嵯峨家の嵯峨浩妃殿下である（4頁上段）。

#### ▲「反論」▼

朝鮮史研究会編編集代表旗田 巍『朝鮮の歴史』（三省堂、1974年）は、こう記述している。

13世紀における「モンゴル（元）の侵略」に対して最後まで抗戦した「三別抄（サムビョルチョ）」〔筆者の祖先がその指導者の1人（将軍）〕は、「朝鮮南部各地の農民の

支持をえて抗戦したあと、ついに1273年に打ち破られた」。その後「約半世紀のあいだ、高麗にはさまざまな元の重圧がのしかかり、大きな影響を受けた。高麗王室は弱化した王権の回復を、元との一体化によって実現しようとはかり、歴代の王は元室から正妃を迎え、その子が即位した」(106頁)。

この歴史的な出来事は、元の国の立場からみて、どういう両国関係を政治的にもつものであったかを考えればよいのである。つまり、当時の高麗が元から王妃を迎えなければ「どうなったか」である。李 垠と梨本宮方子〔韓国での氏名は、李 方子 (いばんじゃ)〕との政略結婚の狙いも、これにて類推すればよい。以前だが国家・民族間の紛争において、特定の意味がこめられた「民族浄化」が叫ばれたこともあった。おぞましい歴史の事態が発生していた。

いまでは朝鮮王朝は存在しない。「溥 儀の満州国」も幻と化した。日本の皇室は残っているが。日本の皇室も実は、敗戦直後しばらくの期間、非常に危うい状況に置かれていた、とだけ付記しておく。

## 第2幕 「2008. 11. 2」 ■ 航空自衛隊幕僚長の繰り言を批判する ■

◎ 田母神俊雄稿「日本は侵略国家であったのか」は、そのとおりである ◎

### 【航空自衛隊高官のアナクロ発言】

昨日の本ブログ「2008. 11. 1」は紙面が足りず、書いているうちに自動的に「尻切れトンボの状態」となる現象が起きたので、途中で筆を置き適当に切りあげていた。「昨日」④「若干の反論」につづけて、今日は⑤⑥として記述する。ここでは新たに、asahi.comの報道（2008年11月1日00時40分）「空自トップを更迭 懸賞論文で『日本の侵略ぬれぎぬ』を、あらためて参照しておきたい。

航空自衛隊トップの田母神（たもがみ）俊雄・航空幕僚長（60歳）が「我が国が侵略国家だったというのはぬれぎぬ」と主張する論文を書き、民間企業が主催した懸賞論文に応募していたことがわかった。旧満州・朝鮮半島の植民地化や第2次大戦での日本の役割を一貫して正当化し、集団的自衛権の行使を禁じる現行憲法に疑問を呈している。政府見解を否定する内容で、浜田防衛相は〔10月〕31日、田母神氏の更迭を決めた。

日本政府は同日深夜の持ち回り閣議で、田母神氏を航空幕僚監部付とする人事を承認した。政府は1995年に、植民地支配と侵略で「アジア諸国の人々に、多大の損害と苦痛を与えた」とした村山首相談話を閣議決定した。麻生首相も継承する考えを表明している。実力部隊を指揮する制服組の高官が、アジアでの日本の侵略行為を公然と否定したことは、麻生政権のアジア外交にとって痛手となる。武器使用制約の緩和など自衛隊の運用政策にも踏みこんでおり、文民統制（シビリアンコントロール）の観点からも問題視されることは必至。野党各党は国会で政府の責任を追及する構えだ。

浜田氏は31日夜、防衛省で記者団に「政府見解と明らかに異なる意見を公にすることは空幕長として不適切で、速やかに職を解く」と述べた。麻生首相周辺によると、首相は同日夕に論文を読んで「不適切」と判断し、更迭に向けた調整に入ったという。首相は同日夜、首相官邸で記者団に「個人的に出したとしても、それは、今、立場が立場だから、適切じゃないね」と語った。田母神氏は同日夜、東京都内の自宅で取材に応じ、更迭について「政府の指示に淡々と従います」と答えた。論文の内容については「来週以降に答えます」と述べた。

論文の題は「日本は侵略国家であったのか」。ホテルチェーンなどを展開するアパグループが主催する第1回「真の近現代史観」懸賞論文の最優秀賞（賞金300万円）に選ばれた。同社は31日、ホームページで論文を公表。防衛省詰の報道各社に報道発



表文を配布したことから、投稿の事実が明らかになった。

論文は、日中戦争について「中国政府から『日本の侵略』を執拗に追及されるが、我が国は蒋介石により日中戦争に引きずり込まれた被害者」と主張。旧満州、朝鮮半島について日本の植民地支配で「現地の人々は圧政から解放され、生活水準も格段に向上した」としている。日本の安全保障政策についても「集団的自衛権も行使できない。武器使用も制約が多く、攻撃的兵器の保有も禁止されている。(東京裁判の)マインドコントロールから解放されない限り我が国を自らの力で守る体制が完成しない」と、抜本的な転換を求めている (<http://www.asahi.com/politics/update/1031/TKY200810310298.html>)。

### ⑤ 田母神俊雄「論文：日本は侵略国家であったのか」批判〔反論〕の続編

田母神俊雄は、こういつていた。筆者流に事実を記述するかたちで、その主旨を再筆する。

旧朝鮮王朝において最後王族となった李 垠 (イウン) は、10歳の時に日本に連れてこられ、学習院に学んだあと陸軍士官学校29期の卒業生となり、のちに陸軍中將に栄進・活躍した。日本政府は、いわば人質だった李 垠を王族として丁重に遇したという。李の妃となったのは、日本の貴族〔華族〕：梨本宮家の梨本宮方子 (まさこ) であるが、昭和天皇の妃候補にもなった女性である。

※ ここで、李 方子の写真3葉を紹介する (左は：1918年。フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』。中は：1920年結婚時 <http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/rimasako.htm>)。右は：晩年 <http://www.cc.matsuyama-u.ac.jp/~tamura/rimasako.htm>)。



もし、日本政府が李王朝を潰すつもりなら、このような高貴な女性を李 垠のもとに嫁がせはしなかったという。宮内省 (当時) は2人のために1930年に新居を建設した。現在の赤坂プリンスホテル別館である。また、清朝最後の皇帝で満州帝国皇帝に担ぎあげられた溥 儀 (フギ) の弟君、溥 傑 (フケツ) に嫁いだのは、日本の華族嵯峨家の嵯峨 浩で

あった。

田母神の「政略結婚」の意図を無視した以上のような「文章」に反論するのは、実にくだらなくも思える。だが、かといって無視しておけば「その浅薄な主張を是認しかねない」態度の放置を意味する。ここに重ねて批判を提示しておく。敗戦後において日本の華族制度は廃止された。ただし、皇族は日本国憲法のもとに再利用される政治的遺物＝伝統となった。敗戦後、皇室はその根幹を揺るがされるような〈GHQからの圧力〉を受けていた。この事実は、日本国憲法のなかで天皇の位置づけが規定されて落ちつくまで、裕仁にとって〈頭痛の種〉でありつづけた。

### ▲「反論：続の1」▼

工藤美代子『ジミーと呼ばれた日―若き日の明仁天皇―』（恒文社、2002年）は、平成天皇の少年期に関する本である。――「あなたの名前はジミーです」。「ヴァイニング夫人に送り続けられた天皇家のアルバムと手紙初公開！ 若き明仁プリンスの愛と苦悩の戦後史を追う渾身のノンフィクション」。同書の目次は、以下のようなものである。

序章	あなたの名前はジミーです	第1章	戦渦の朝に生まれて
第2章	敗戦・復興の中から	第3章	レッスン開始
第4章	「お濠ばた」の元帥	第5章	青年皇太子
終章	「窓」の向うの世界へ		

いまは平成天皇となった当時の皇太子明仁は、GHQ＝アメリカの人質にはならなかったけれども、アメリカのよき理解者になるべく「家庭教師：ヴァイニング夫人」を派遣され、教育を受けていた。この体験が現在の天皇にどのような精神的影響を与えたかは「興味ある経歴」である。

### ▲「反論：続の2」▼

レイ・アーヴィル・ムーア編『天皇がバイブルを読んだ日』（講談社、昭和52〔1977〕年）。「1946年1月、〔昭和〕天皇が『キリスト教について勉強するため』に、賀川豊彦を宮中に招いた。約2時間にわたる会見のなかで、天皇はキリスト教について多くの質問をし、賀川が聖書の一節を読むと、注意深く聞きいていた」（レイ・ムーア『神の兵士』より。同書「帯」）。「マッカーサーは」「最高司令官の特権を行使して、キリスト教から生まれる『精神的核』を占領政策に注入しようとした。彼の理解する任務は、既存のものの復活あるいは回復ではなく、日本人がかつて経験したこのないなにかを導入することであった」（24頁）。

昭和天皇は敗戦後の一定期間、自分の立場や生命が保障されるかどうかをひどく懸念していた。アメリカに対する自分の心証をよくする準備の一環として「キリスト教への関心」

を強く示すための勉強もしたのである。皇居のなかでは一時期「聖書研究会」がもたれていた。しかし、昭和天皇夫婦は戦後の状況変質のなかで、自分たちの「皇族としての地位」が安泰であることに自信をもつにいたった。

結婚後まだ平成天皇が皇太子だったとき、弟にあたる常陸宮はつねに美智子を庇い、よき相談相手だったといわれる。だが、美智子がキリスト教について正仁親王と話したことから、キリスト教を布教していると昭和天皇に誤解を受け、不興を買ってしまったと伝えられている。敗戦後の〈昭和20年代〉とこれに対する〈昭和30年代〉とにおいて、昭和天皇がキリスト教に対して抱いた姿勢は顕著に異なっていた。

もともと、自家本来の伝統的な宗教である「神道を信心する天皇一家」にとって、キリスト教は「最強・最大・最悪の対抗宗教」を意味した。ところが、嫁入りしてきた美智子が配偶者の弟である常陸宮とキリスト教について語りあった事実が発生した。昭和天皇夫婦は激怒する。その怒りは美智子を恐怖させた。美智子が昭和天皇夫婦に平身低頭して謝っても、とうてい許されなかった。

美智子と常陸宮のキリスト教に関する会話は、昭和天皇夫婦に対して、日本占領期における「昭和20年代の記憶として残されている〈皇室とキリスト教〉」の「辛く深刻だった関係問題」を彷彿させた。2人のその会話は、当時の占領軍に由来し、天皇一家＝「自分たちの宗教生活に押しこめられていた」キリスト教問題、いいかえれば「天皇家に対して否応なしに生起させられた『宗教上の二律背反的な精神状況』を想起させた」のである。それだけに昭和天皇夫婦は、憎悪の念を燃えたぎらせて、その2人の会話そのものを全面的に否定、抹殺しておかねば済まなかった。

くわえて、当時の皇太子明仁にあっては精神的に、キリスト教に対する「〈神道〉的な耐性」に関して、確実な自信がなかったはずである。だから、昭和天皇夫婦の美智子に対する怒りは並外れたものであった。昭和天皇夫婦は、皇室の存亡にかかわるような「嫁のけしからぬ口出し：議論そのものがあつた」と受けとめていた。

#### ⑥ アパグループの代表〔C. E. O.：最高執行経営者〕

元谷外志雄（ペンネーム：藤 誠志）は、  
「小松基地金沢友の会」を務めている。

元谷外志雄の著書『報道されない近現代史—戦後歴史は核を廻る闘ぎ合い—』（産経新聞出版、2008年4月）の出版解説に付された文章を読めば、11月1日に報道されはじめた田母神俊雄航空自衛隊幕僚長が「〇〇〇賞」を受賞するにいたった経緯に関して、なにかそのヒントがつかめそうである。紀伊國屋書店の bookweb に出ている解説をみると、こう記述されている。

本書『報道されない近現代史—戦後歴史は核を廻る闘ぎ合い—』は、誰も報じなかった近現代史の闇の部分、ソ連の崩壊により公表された資料と1990年代後半になってアメリカが公開した当時のソ連の暗号を解読した情報「ベノナファイル」と、筆者が独自のアンテナ（海外友人情報ネットワーク）で知り得た情報をもとに、冷静かつ大胆に解析して白日のもとにさらしたもので、北朝鮮、中国、ロシア、アメリカと核保有国に包囲された今日の日本の国家的危機に際し、自ら守る力がなくては真の独立国とは言えないと、「憂国」の想いを込め執筆したものである。主要目次はつぎのようである。

- |                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 第1章 北朝鮮危機に備えよ       | 第2章 中国は日本を狙う         |
| 第3章 「核」を論ぜずして安全保障なし | 第4章 正しい歴史認識を問う       |
| 第5章 もう一つの日本の危機と教訓   | 第6章 溶けゆく日本に「覚醒せよ」と喝！ |

★ 著者紹介：元谷外志雄 [モトヤ トシオ] ★

ペンネーム「藤 誠志」。アパグループC. E. O.。

石川県小松市生まれ。現在、アパグループ（全14社）の代表取締役を務め、建築・設計中を含め全国に68棟・客室数17000室を超える全てのホテルを所有・運営し、所有・賃貸・運用・管理するビル、マンションなどは400棟を超える。近年は、リゾート業も含む総合複合都市開発事業に力を注ぎ、地上44階建アップルタワー（東雲キャナルコート）や地上46階建淀屋橋アップルタワーレジデンスなど全国に展開。また、世界65カ国以上に及ぶ諸国の遊学と経験と見聞で検証した歴史観・世界観・国家観で磨き抜かれた鋭い感性は、CMプロデューサー・コピーライター・プランナー・デザイナーとしても、いかに発揮する他、自ら編集長を務める月刊誌「アップルタウン」（毎月5万5千部発行）に、187回に亘りペンネーム藤誠志による社会時評エッセイを執筆。

キューバのカストロ前国家評議会議長との鼎談をはじめ、李 登輝台湾元総統、森 喜朗元内閣総理大臣、金 泳三韓国元大統領、ホセ・デベネシアフィリピン下院議長兼与党総裁、リチャード・アーミテージ第13代米国務副長官と対談を行うなど世界各国に多数の交友関係を築いてきた。また、モータースポーツをこよなく愛しレース経験も持つなど、1990年にはオーストラリアF1Aワールドラリーにプライベートチームをエントリー、Nクラス総合世界第三位に輝く。2007年にはF-15DJ型戦闘機に搭乗、空中戦闘訓練に参加し7.5Gを体感。その他、ウェーブ産経代表幹事、航空自衛隊小松基地金沢友の会会長などを務める。

ここで、元谷外志雄『報道されない近現代史—戦後歴史は核を廻る闘ぎ合い—』（産経新聞出版、2008年4月）の出版解説に付されたこの文章を読めば、関連する事情が理解できる。——航空自衛隊トップの田母神俊雄航空幕僚長が「我が国が侵略国家だったというのはぬれぎぬ」と主張する論文を書き、「ペンネームに〈藤 誠志〉なる氏名」をかかげた元谷外志雄が経営する民間会社「主催の懸賞論文」の「第1回『真の近現代史観』」に応募し、最優秀賞を受けた。勘のするどい識者であれば、そこに胡散臭いなにかを感じとるかもし

れない。出来合いのレース「応募→受賞」ではないかと。

それほどに見聞・交遊が広く、豊かな識見ももち、八面六臂の活躍をし、世界をみる鑑識眼をめぐらすことのできるという人物「元谷外志雄」が、なぜ、田母神の書いた〈きわめ稚拙な軍事思想〉と〈とても狭隘な世界観〉しか提示できていない、そして「政治理論的・軍事思想的にもひどく未熟な論文」に対して、渡部昇一のような〈最右翼コテコテ知識人〉に審査を任せる方法で、自分の名称〔ペンネーム〕を冠した「〇〇〇賞」を授与したのか？

結局、ペンネーム《藤 誠志》を使う元谷みずから宣伝するところの、自身の「諸国の遊学と経験と見聞で検証した歴史観・世界観・国家観で磨き抜かれた鋭い感性」は、いったいどこにみいだせばよいのか？ しかし、この疑問に関する「おおよその解答」を用意することはむずかしくはない。

こう考えたのではないか。――他者の目線に映る範囲内では探知の困難な『元谷＝藤のその「鋭い感性」』は、広く世の中にしらしめなければならない。そのためには、元谷自身が創設した「〇〇〇賞」を山車に使い、この〈ひかり輝やく賞〉を世間に引き出すかたちをもって、あまねく認知させねばならない。簡単にいえば、藤の「自己顕示欲」を披露するための舞台を用意したい。彼がこれを仕掛け実現させるための財力・資力は、ホテル経営などで儲けており、十分ある。

いずれにせよ、元谷外志雄〔＝藤 誠志〕自身には「それだけの尊い価値」があり、この人物の「名を冠した賞」（最優秀賞）を授ける相手を、今回まず1人みつけねばならなかった。しかしながら、今回の「被受賞者の論文」が《軍人》田母神俊雄の筆になる点はさておき、それにしても「あまりに出来のよくない作品」であった。どちらかといえば、政治信条的にはまちがいなく「元谷＝藤の思想・立場」にかなり近いはずの歴史学者秦郁彦までが、その田母神の〈文章〉を一刀両断にした。この秦は、ボロクソの寸評さえ新聞に語っていたのだから、それこそ「誠に始末に悪い」「論文」の出場である。おまけに、日本国自衛隊「軍人の学識的水準」も疑われることになった。

究極的な狙いどころはともかく、元谷自身の名声を挙げる点にあった。しかし、そうした「自分をヨイショ」するための「〇〇〇賞」の創設が、はたしてこの世の中〔日本にだけかぎっても〕において今後、いかほど通用していくのか見物である。「お金」をたっぷり充当すれば「達成できるモノ」と「そうでないモノ」のみきわめは、誰にでも困難な業である。とくにいままでは、お金をたっぷり使えてなんでも自分の思いどおりになると自信を深めてきた人ほど、そのような傾向におちいりやすい。

ところで、今回の田母神論文「日本は侵略国家であったのか」は、出来たてホヤホヤの総理大臣麻生太郎が衆議院の解散を少しでもさきのぼしし、自民党〔およびその禪担ぎみいたいな公明党とからなる〕政権をなんとか長く生かそうとしている段階において、この政

権に対する野党の格好の攻撃対象を与えたかたちとなってしまった。田母神の稚拙な「論文」はこのように、政局にも特定の影響をもたらしている。

### 第3幕 「2008. 11. 3」 ■ 空幕僚長の歴史認識欠如 ■

#### ◎ 田母神俊雄の「稚拙な稿文」◎

#### 【死にそこなった過去の亡霊が空を飛ぶ】

本ブログ「2008. 11. 1」「2008. 11. 2」はともに紙白不足のため記述するうちに「尻切れトンボの文章形態」をきたしていた。そこで、両日はいずれも途中で筆を擱き、せっかく書いたのに飛んでしまった文章部分を再度補述したりもしておいた。「1昨日」④「若干の反論」および「昨日」に記述した項目⑤⑥につづけて、10月31日に発覚した田母神俊雄航空自衛隊幕僚長「懸賞論文」受賞事件を批判する論及をおこないたい。――興味をもたれる方はできれば、日付をさかのぼるかたちで読まれることを希望したくも思う。

#### ⑦ 2008年11月1日『毎日新聞』の報道から

航空幕僚長：田母神俊雄が「文民統制」の基本を無視し、軍人としての「立場もわきまえず」に懸賞論文への応募し、受賞した事件に関しては、すでに11月1日の時点で、マスコミからつぎのように批判されている（『毎日新聞』2008年11月1日01時09分。<http://mainichi.jp/select/wadai/news/20081101k0000m010152000c.html>）。

#### ▽「軍事アナリストの小川和久さんの話」

田母神氏の論文公表は、空自トップとして立場をわきまえない幼児的な行動だ。内容も非科学的で、自衛隊をはじめ、日本に単純思考のタカ派が台頭しているのではないかとの警戒感を世界に与える恐れがある。国家の存亡を左右する組織トップの不祥事だけに、厳しく処罰されるべきだ。

#### ▽「作家の梁石日（ヤン・ソギル）さんの話」

航空自衛隊のトップがあんな論文を書くようでは、本当にシビリアンコントロールが働いているのかと思わざるをえない。旧満州や朝鮮半島が、日本政府と日本軍の努力によって生活水準が向上したなど、とんでもない妄想だ。なぜこのような極右の人物を空幕長にしたのか。こんなことでは日本が本質的に軍国主義から脱していないと、アジアの国々から思われかねない。

出所)

#### ⑧ 2008年11月2日『朝日新聞』「社説」－空幕長更迭、ぞっとする自衛官の暴走－

こんなゆがんだ考えの持ち主が、こともあろうに自衛隊組織のトップにいたとは。驚き、あきれ、そして心胆が寒くなるような事件である。田母神（たもがみ）俊雄・航空幕僚長が日本の植民地支配や侵略行為を正当化し、旧軍を美化する趣旨の論文を書き、民間企業の懸賞に応募していた。

論文はこんな内容だ。「我が国は蒋介石により日中戦争に引きずり込まれた被害者」「我が国は極めて穏当な植民地統治をした」「日本はルーズベルト（米大統領）の仕掛けた罠にはまり、真珠湾攻撃を執行した」「我が国が侵略国家だったというのはまさに濡れ衣である」——。一部の右派言論人らが好んで使う、実証的データの乏しい歴史解釈や身勝手な主張がこれでもかと並ぶ。

空幕長は5万人の航空自衛隊のトップである。陸上、海上の幕僚長とともに制服の自衛官を統括し、防衛相を補佐する。軍事専門家としての能力はむろんのこと、高い人格や識見、バランスのとれた判断力が求められる。その立場で懸賞論文に応募すること自体、職務に対する自覚の欠如を物語っているが、田母神氏の奇矯な言動は今回に限ったことではない。

4月には航空自衛隊のイラクでの輸送活動を違憲だとした名古屋高裁の判決について「そんなの関係ねえ」と記者会見でちゃかして問題になった。自衛隊の部隊や教育組織での発言で、田母神氏の歴史認識などが偏っていることは以前から知られていた。防衛省内では要注意人物だと広く認識されていたのだ。なのに歴代の防衛首脳は田母神氏の言動を放置し、トップにまで上り詰めさせた。その人物が政府の基本方針を堂々と無視して振る舞い、それをだれも止められない。

これはもう「文民統制」の危機というべきだ。浜田防衛相は田母神氏を更迭したが、この過ちの重大さはそれですまされるものではない。制服組の人事については、政治家や内局の背広組幹部も関与しないのが慣習だった。この仕組みを抜本的に改めない限り、組織の健全さは保てないことを、今回の事件ははっきり示している。防衛大学校での教育や幹部養成課程なども見直す必要がある。

国際関係への影響も深刻だ。自衛隊には、中国や韓国など近隣国が神経をとがらせてきた。長年の努力で少しずつ信頼を積み重ねてきたのに、その成果が大きく損なわれかねない。米国も開いた口がふさがらぬまい。多くの自衛官もとんだ迷惑だろう。日本の国益は深く傷ついた。麻生首相は今回の論文を「不適切」と語ったが、そんな認識ではまったく不十分だ。まず、この事態を生んだ組織や制度の欠陥を徹底的に調べ、その結果と改善策を国会に報告すべきだ（<http://www.asahi.com/paper/editorial.html>）。



▼「珍しく」と言うべきか、時代小説の藤沢周平に政治がらみのキナ臭い問題に触れた随筆がある。先の戦争をめぐる教科書問題で騒然となったとき、〈(蹂躪された)相手の立場に立ってみることを自虐的などというのは軽率な言い方である〉と、その歴史観の一端を述べている。

▼そうした相手の立場はおろか、自らの立場も、日本政府の立場もおかまいなしの「突撃」には驚いた。航空自衛隊トップの田母神俊雄・航空幕僚長が「我が国が侵略国家だったというのは濡れ衣」と主張する論文を書いて更迭された。

▼その名前に記憶のない方も、思い出すことがあろう。4月に名古屋高裁が「空自のイラクでの活動は違憲」と判断したとき、記者会見で「そんなの関係ねえ」とやった人だ。周囲から「猛将」と評されているらしい。

▼あれは失言だったのかも知れない。だが今度は「思っていることを国民や国家のために書いた」そうだ。民間の懸賞に応募し、最優秀に選ばれて公表された。個人としての応募というが、肩書は衣服と違う。都合良く脱いだり着たりできるはずもない。

▼内容はアジア諸国への侵略などを謝罪した政府見解を否定するものだ。この手の認識は国内では留飲を下げる者がいても、国境まで行けば力を失う。その先へは広がらぬ独善にほかなるまい。

▼加害の意識を欠き、事実目をつむる内向きの論理は危険なものになりかねない。冒頭の藤沢周平は、いつもの穏やかな筆致ながら、そう案じていた。不祥事続きの自衛隊である。後任は猛将より、知将が望ましい (<http://www.asahi.com/paper/column.html>)。

## ⑩ 2008年11月2日「ニュース 速報 YOMIURI ONLINE (読売新聞)」記事

－前空幕長が論文受賞を事前承諾、主催者「本人から確認」－

田母神俊雄・前航空幕僚長(60歳)(10月31日付で航空幕僚監部付)が、昭和戦争などに関して投稿した論文の内容をめぐって更迭された問題で、田母神氏の論文を最優秀賞に選ぶさい、審査委員から「この論文を選出して、空幕長の立場は大丈夫なのか」との懸念が示され、主催者側が確認をとっていた。

審査委員長の渡部昇一・上智大名誉教授によると、主催者側からはその後、「(本人から)大丈夫との確認を得た」との説明を受け、田母神氏の作品を最優秀賞に選んだという。懸賞論文は、ホテル・マンション経営のアパグループ(東京都港区)が「真の近現代史観」をテーマに5月に募集。約230の応募論文のなかから、田母神氏の論文「日本は侵略国家であったのか」など20点余りに絞り込まれ、上位4点については、最終段階で経歴が明らかにされたという。

防衛省によると、田母神氏は現時点で、最優秀賞の賞金300万円とホテル招待券を受けとっていない。一方、田母神氏以外に、複数の現役自衛官が同じ懸賞論文に応募していたことが関係者の話でわかった。論文を外部に発表する際に内規で定められている届け出があったかどうかについて、同省では「現時点で把握していない」としている（2008年11月2日03時06分 読売新聞。<http://www.yomiuri.co.jp/national/news/20081102-0YT1T00113.htm?from=main1>）。

#### ⑪ 2008年11月2日『読売新聞』「社説」－空幕長更迭 立場忘れた軽率な論文発表－

航空自衛隊のトップという立場を忘れた、極めて軽率な行為だ。政府は、「我が国が侵略国家だったというのは濡れ衣だ」などとする論文を発表した田母神俊雄・航空幕僚長を更迭した。麻生内閣も、「植民地支配と侵略によって、アジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えた」として反省と謝罪を表明した1995年の村山首相談話を踏襲している。浜田防衛相は、「政府見解と明らかに異なる意見を公にすることは、航空幕僚長として、大変不適切だ」と更迭の理由を述べた。当然だろう。論文の内容が判明した直後、迅速に人事を断行したのは、国会審議や近隣諸国との関係に及ぼす悪影響を最小限に抑える狙いもあったとみられる。

論文は、民間企業の懸賞論文に応募したものだ。戦前の日本による植民地支配や昭和戦争について、一貫して日本の立場を正当化しようと試みている。日中戦争については、「我が国は蒋介石により引きずり込まれた被害者」と主張している。だが、戦争全体を見れば、日本の侵略だったことは否定できない。日米戦争の開戦も「アメリカによって慎重に仕掛けられた罠」と決めつける。論文は、事実誤認や、歴史家の多くが採用していない見方が目立っており、粗雑な内容だ。もとより、歴史認識というものは、思想・信条の自由と通底する面があり、昭和戦争に関して、個々人がそれぞれ歴史認識を持つことは自由である。しかし、田母神氏は自衛隊の最高幹部という要職にあった。政府見解と相いれない論文を発表すれば重大な事態を招く、という認識がなかったのなら、その資質に大いに疑問がある。

論文には、集団的自衛権が行使できないとする政府の憲法解釈や自衛隊の武器使用の制約など、重要な問題提起も含まれている。だが、この論文の文脈の中で主張しても、説得力をもたない。こうした問題の多い論文の発表を、なぜ、だれもチェックできなかったのか。これでは、自衛隊に対する国民や諸外国の信頼が揺らぎかねない。防衛省は、今回のような事態の再発を防ぐには、制服組の自衛官の教育と人事管理を強化する必要がある。政治の文民統制（シビリアンコントロール）のあり方も問われかねない（2008年11月2日02時16分 読売新聞。<http://www.yomiuri.co.jp/editorial/news/20081101-0YT1T00763.htm?from=nwla>）。

## ⑫ アパグループについて

――ところが、以上新聞の各報道などがほとんど触れていないのが、全国でホテル業を展開するアパグループのCEOである元谷外志雄〔モトヤ トシオ：ペンネーム「藤 誠志」〕の存在である。本ブログの筆者は、この元谷CEOこそが、今回事件を生み出した中心人物であると観察している。元谷は、自身の名誉欲を世の中に広め浸透させようと今回、「真の近現代史観」と名づけた自分好みの懸賞論文を募り、この「最優秀藤誠志賞」に航空幕僚長の田母神俊雄の論文「日本は侵略国家であったのか」を選んだ。田母神論文の内容と主張がいかんぞで時代錯誤であるかは、前段に引照した新聞各紙が十二分に説明している。

アパグループCEO元谷外志雄が求めた「真の近現代史観」をもっとも優秀に語ってくれた田母神「論文」が、この21世紀の時代に日本社会から「総スキャン」を食らうべき〈お粗末な中身〉であるだけでなく、近隣諸国からの反撥をわざわざ招く始末にもなっている。元谷の定義しているはずの「真の近代史観」がそれほどまで雑駁だったらしい事実は、「藤 誠志賞」の審査委員長を務めた渡部昇一の間接的・実質的な審査責任に遡及するものであるけれども、直接的・形式的な授章責任にまつわる総括的な責任問題は、そもそも元谷に発生するものである。

それにしても、ずいぶんいい加減な審査を実施した、いわゆる自虐史観「反対」の立場に固執する学者：渡部昇一委員長は、田母神に優秀賞を授与したら、世論から今回のごとき反撥や批判が即座に沸きおこる事態を予想すらしえなかった。世の中における〈より健全な言論〉の動向に無頓着というか無感覚になった老齢の元大学教授〔上智大学名誉教授〕は、自身が悟るべき「隠遁の時期の認知」を逸していたのかもしれない。老醜を世間に晒したといってもいい。

田母神も田母神である。「文民統制」の意識などコレポッチもない「軍人の立場」であり、旧日本軍人の意識感覚そのものに近い。「日本というのは古い歴史と優れた伝統を持つ素晴らしい国なのだ」った（田母神論文、9頁）と断言するけれども、なぜか英・米・蘭・中との戦争に敗れた。田母神は「その歴史と伝統にもどれ」という発想が自己矛盾（アポリア）に落ちこむ必然性を理解できていない。

「その歴史と伝統」と田母神が形容した〈大和精神：魂〉は、まちがいなく一度、アメリカとの大戦争で木っ端みじんに粉碎された。その結果として、この国には「数多くの甚大な不幸・悲惨が招来された」。この歴史的事実が実在したにもかかわらず、田母神は、先輩軍人たちがたどった迷路に再び飛びこむ勇氣だけは失っていない。笑止千万の21世紀風軍人精神がこの日本社会に堂々とまかりとおるとも思えない。いまのところ、各社新聞の論調をみるかぎり田母神論文の主張は「まともに相手にされておらず、きびしい批判を受けている」だけである。

### ⑬ 2008年11月2日『産経新聞』「社説」

－空自トップ更迭，歴史観封じてはならない－

航空自衛隊の田母神俊雄幕僚長が，先の大戦を日本の侵略とする見方に疑問を示す論文を公表したとして更迭された。異例のことである。田母神氏の論文には，日本を「蒋介石により日中戦争に引きずり込まれた被害者だ」とするなど，かなり独断的な表現も多い。さらにそうした論文を公表すれば，インド洋での給油支援を継続するための新テロ対策特措法の国会審議などに影響が出るのは明らかである。政府の一員としてそうしたことに配慮が足りなかったことは反省すべきだろう。

だが第一線で国の防衛の指揮に当たる空自トップを一編の論文やその歴史観を理由に，何の弁明の機会も与えぬまま更迭した政府の姿勢も極めて異常である。疑問だと言わざるを得ない。浜田靖一防衛相は，田母神氏の論文が平成7年，村山富市内閣の「村山談話」以来引き継がれている政府見解と異なることを更迭の理由に挙げた。確かに「村山談話」は先の大戦の要因を「植民地支配と侵略」と断じており，閣議決定されている。

だが，談話はいくまで政府の歴史への「見解」であって「政策」ではない。しかも，侵略か否かなどをめぐってさまざまな対立意見がある中で，綿密な史実の検証や論議を経たものではなく，近隣諸国へ配慮を優先した極めて政治的なものだった。その後，談話を引き継いだ内閣でも新たな議論はしていない。このため，与党内には今も「村山談話」の中身の再検討や見直しを求める声が強い。田母神氏の論文がそうした政府見解による呪縛について，内部から疑問を呈したものであるなら，そのこと自体は非難されることではないはずだ。

政府としては，参院での採決の時期が微妙な段階を迎えているテロ特措法や，来月に予定されている日中韓首脳会談への影響を最小限に抑えるため，処分を急いだとしか思えない。テロ特措法の早期成立も中国や韓国との関係も重要である。しかし，そのために個人の自由な歴史観まで抹殺するのであれば，「言論封じ」として，将来に禍根を残すことになる。むしろ今，政府がやるべきことは「村山談話」の中身を含め，歴史についての自由闊達な議論をおこなう，必要があれば見解を見直すということである (<http://sankei.jp.msn.com/affairs/crime/081102/crm0811020318002-n1.htm>)。

この産経新聞の社説は，「綿密な史実の検証や論議を経たものではない田母神「論文」を，まともな「論文」とみなし，軍人が「内部から疑問を呈したもの」と位置づけたらしい。産経新聞「論説委員」たちの思想的立場は明白である。田母神と同じということである。田母神「論文」に最優秀賞を授与した渡部昇一などが「産経新聞社と親密な関係にある」＝「論調：立場をともにする」ことは，あえて指摘するまでもない事実である。

#### ⑭「田母神氏 空自誌にも持論『侵略はウソ』」（昨年5月号）と主張

戦時中の日本の侵略を否定する内容の論文を執筆して更迭された、防衛省の田母神俊雄・前航空幕僚長（60歳）が昨年、空幕長に就任したのち、空自の隊内誌に同様の趣旨の文章を執筆していたことがわかった。浜田防衛相は更迭の理由として「政府見解と異なる意見を公にするのは空幕長として不適切」と述べたが、その文章が出た時点では省内で問題にはならなかった。空自は「個人の一つの考え方という受け止め方だった」としている。

文章は空自幹部らが購読する『鵬友』の昨年5月号に掲載された。幹部らが個人の研究を発表する場で、誌面で「発表された意見などは公的な見解ではない」と断っている。田母神氏は巻頭で「日本人としての誇りをもとう」と題し、「戦後教育の中で我が国の歴史と伝統はひどい無実の罪を着せられてきた。その代表的なものが、日本は朝鮮半島や中国を侵略し残虐の限りを尽くしたというものである」とし、「ウソ、捏造の類であると証明されているが、多くの日本国民はそれを事実として刷り込まれている観がある」と書いている。

「南京大虐殺」に触れ、「混乱の中で本当の民間人が巻き添えになったことはあったかもしれない。しかし日本軍が中国の民間人を組織的に虐殺したことは全く無かったのである」と主張している。また、統合幕僚学校長だった2004年に同誌に書いた文章でも同様の歴史観を主張。隊員にも一般の月刊誌への投稿を勧めていた（asahi.com 2008年11月3日03時01分。）<http://www.asahi.com/national/update/1102/TKY200811020198.html>。

――田母神「論文」はその主張・信念が学問的に実証されておらず、政治的・社会的にも許容されていない。いまの時間帯では『日本経済新聞』2008年11月3日「社説」をインターネット版ではまだ読めないが、同紙2面に掲載されている「社説2」の題目は「田母神空幕長の解任は当然」。航空自衛隊は「勇猛果敢・支離滅裂」と評されるがその典型が彼との指摘。

## 第4幕 「2008. 11. 4」 ■ 田母神航空幕僚長「最優秀賞論文」の真義 ■

◎ 日本は侵略国家でなかったのか ◎

【田母神俊雄「航空自衛隊幕僚長」の勉強不足と独善の論調】

### ① 森川方達『満蒙幻影傳説—「聖戦」灰滅史を旅する

亜洲之現場采訪「余録」抄 1993～2004—』現代書館，2005年

森川方達 [モリカワ ホウタツ] は 1955年広島市に生まれ，1972年から月刊総合誌データマン・取材記者となり以来，フリー・ジャーナリスト。著作『満蒙幻影傳説—「聖戦」灰滅史を旅する 亜洲之現場采訪「余録」抄1993～2004—』（現代書館，2005年）は，B 6 版ながら本文など 638頁の大部である。実は，職場の同僚のある先生が先日，この本の著者にどこかで会ったとき献本され，満洲国の問題に興味のある「本ブログの筆者」にこの本を「読んでみてはどうですか？」といい貸してくれたのである。かなりしんどい分量だったが通読してみた。

— 紀伊國屋書店 bookweb は，本書をこう解説・宣伝する。

現役フリー・ジャーナリストが，現場を踏んで，赤裸々に綴りつづけた取材旅の余録。“一億総「翼賛」化” いちじるしい時流に押しもどされそうになる“自戒”を込めて，終わりなき戦後「敗戦60年」に問う渾身の全編書き下ろしルポルタージュ 1700枚。

目次の紹介は省くが，この森川方達さん，「引っ越しのとき所蔵する図書の段ボール箱」が 600を数えたといっている。本ブログの筆者のばあい，20年まえにした引越のさい，家財運搬用とは別にもう1台「4トンロング・トラック」の用意を業者に依頼し，これを「蔵書を運ぶためだけの引越便」に充てたことを思いだした。この話でもって，われわれ商売の辛く因果な〈仕事の一面〉が理解してもらえるか・・・。

さて，森川方達『満蒙幻影傳説—「聖戦」灰滅史を旅する 亜洲之現場采訪「余録」抄1993～2004—』は，アジア諸国をあちこち渡り歩き取材をしてきた過程で，つぎのような記述 a) ～ f) を組み入れていた。これら記述を紹介するのは，このところ連日記述している「航空自衛隊幕僚長」田母神 (たもがみ) 俊雄・航空幕僚長 (60歳) が，ホテルチェーンなどを展開するアパグループの主催する第1回「真の近現代史観」懸賞論文に応募し，最優秀賞を受けた文章：「日本は侵略国家であったのか」を，あらためて批判・反論するうえでの「手がかり＝素材」に利用したいがためである。

以下に、森川方達の文章を適宜引照する（読むやすくするため改行なども適当に入れてある。引用は頁と上・下段）。田母神の論文からの引用箇所は「頁と上・中・下段」で註記しておく。なお、田母神「論文」はつぎのアドレスにリンクされている。参照されたい方々のため、ここに再度かかげておいた。

※ 田母神「論文」はつぎのアドレス

[http://www.apa.co.jp/book\\_report/images/2008jyusyou\\_saiyuusyu.pdf](http://www.apa.co.jp/book_report/images/2008jyusyou_saiyuusyu.pdf)

## ② 森川著書からの引照による田母神「論文」批判

－ a) から f) まで記述があるのだが、紙面の関係で c) までの3点だけ記述し、残る d) e) f) は、明日〔以降〕に記述したい－

### a) 「戦場となったフィリピンの悲惨」

▼凍付く知床の里でのインタビューは、いつしか酒盛りへと変わる。帰路は吹雪きとなる。「皇軍」兵士として出征。「上官の命令」にしたがい銃剣で何人もの比島人ゲリラを殺した。じっさいには「ゲリラ」だけでなく丸腰と分っている非戦闘員の住民を無差別に殺戮したのだった。

▼一方、銃後では、新婚の妻や写真でしかみたことのない乳飲み子を空襲で亡くす。それが戦争である。我が戦友が乱暴した現地フィリピン人女性を3人がかりで、銃剣で突いて絶命させた。首の骨が折れる鈍い音は、いまでも耳にこびりついていると、老人は絶句した。

▼「米問題」に国論を二分した昨年末の国会では、尻切れトンボに問題化しなかったが、『アジア・太平洋戦争』の戦地における現地住民を含む全死傷者数の実態について戦後48年を経た現在、日本国政府の公式見解は、外務省アジア局長によれば、平然と「把握していない」との答弁、いやはや驚く、いまだなおざりにされている「戦争責任」。

▼バンカーショットで人骨が宙を舞うこともあるマニラ空港近くのゴルフ場でのウソのような現実に暗澹とさせられる。「戦後」をルポする旅は、まだつづく（森川、17頁上段）。

→田母神は「日本軍を直接見ていない人たちが日本軍の残虐行為を吹聴している場合が多い」（田母神、9頁上段）といていたが、これは、歴史的根拠を完全に無視した「空虚な観念」の、単なる乱舞的な言辞である。

### b) 「日本帝国 アンド 米帝国」の戦争現場

皇軍（日本軍）が上陸した1895年5月から翌96年にかけて台湾全土の制圧を目的としておこなわれた占領作戦では、1万5千人にのぼる台湾人が匪徒（暴徒）とみなされて掃討・殺戮された。さらにはその翌1897年から1902（明治35）年までのあいだにおける、台湾の“抗日運動”に対する、まさに恐るべき徹底した弾圧は、つぎの数字が如実に物語っている。「刑死匪徒」とされる3112人、「補殺匪徒」7516人。この記録によるだけでも実に

1万人を超える殺戮がおこなわれたことが分かる。合わせて7年間に2万5千人を上まわる台湾住民が“虐殺”された計算になる(森川, 545頁)。

わずか2年たらずの間、実に50万人を超える日本人が屍をさらした南の島フィリピン、厚生省の統計による「戦死者49万8千人」という数字は、「対英米蘭戦争(大東亜戦争)」における日本軍人死者総計(185万8千人)の26.8%を占める。にもまして、フィリピン「親米政権」の閣僚ロムロ(1949年「国連総会」議長)が主張した当時の総人口1千8百万に対してフィリピン人戦争犠牲者は百万人を超えるという恐るべき現実。(日・米)はそこを死地と化した。そのほとんどがゲリラとみなされて虐殺されたり、逃げ場なく戦闘に巻きこまれた住民たちである。

「アジアの解放」と「独立」をうたった「大東亜共栄圏建設」。それは、かくも見境ない虐殺の連鎖をもたらす。天皇の軍隊(皇軍)は、いったいアジアでなにをしたのか。「慰霊」とは、いかになされてしかるべきか。東京裁判の「戦犯」だから「悪者」ではない。「マッカーサーが善玉。東條は悪玉」でも、実はない。ともに侵略者(米軍と皇軍)が軍靴で踏み荒らし、おびただしい犠牲者を生んだ。このことへの真摯な自省と謝罪なくして「日米同盟」などとは片腹痛い。コレヒドール要塞を奪還したマッカーサー元帥が上陸用舟艇から部下の将兵らを引き連れ、浅瀬を歩んでいるようすを再現したコレヒドール浜辺のブロンズ像には「U・Sアメリカン／帝国主義」の本性がむきだしになっている。

たとえ敗者として、みずからの死を「散華」と美辞麗句で称えることは、現地犠牲者を冒瀆するにひとしい。いわんや国破れたる「戦争指導者」たちを「殉国の士」と称するようなざまは、もはや“時代錯誤”の以前に、名もなき幾多の同胞犠牲者たちを愚弄するものにほかなるまい。いくら人しれず母国の片隅とはいえども(といっても、国定公園のただなかに位置する)まったく気色が悪い(以上、森川, 32頁上段・下段)。

→田母神は「当時の列強といわれる国々との比較で考えてみると日本の満州や朝鮮や台湾に対する思い入れは、列強の植民地統治とは全く違っている」(田母神, 4頁中段)と断定している。だが、帝国主義諸国に等級、つまり一流と二流(亜流)があってもその実質は同じである。かといって、日本帝国が過去において米英帝国との戦いに敗北した事実を介して、「現在の日本国」にはなんの罪過もなかった、とまでいってのけられる勇気をもちるのであればこれは、「歴史・時代を観る眼のない」無識者にのみ与えられた特権といえる。それこそ、「目くそ〔A国やB国〕と鼻くそ〔J国〕」という『同志の〈相打ち：口撃!〉』になる。

### c) 「沖縄戦と朝鮮人、ヒロシマで被爆死した朝鮮人など」

沖縄県の広大な摩文仁の丘・平和祈念講演でもひとときわ目を惹く平和祈念堂が聳える。そのかたわらに丸い土まんじゅうを象った巨大な石塚。それを銘した碑は、こう刻む。――「(日本の強制的な募集によって大陸や南方各戦線へと送られた韓国人青年たちは)沖縄の地にも徴兵、徴用として動員された1万余名があらゆる艱難を強いられたあげく、あ



るいは戦死，あるいは虐殺されるなど惜しくも犠牲になった」。1978（昭和53）年の夏，建立，除幕されたばかりのそれを読んで，私は衝撃を受けたことを記憶している。再読して今回はメモをとる。

ヒロシマで被爆死した（虐殺された）朝鮮半島の出身者は約2万人といわれるが（後障害を負って生き残った人びとはその限りではない）が数の問題ではなく，まさに死地へと連れゆかれて，無念にも斃れた韓国（朝鮮）人1万有余というのは経緯からして「虐殺」されたも同然であった。「ひめゆり学徒隊」の戦没者にしたところで，すっかり観光用に整備された叙情的な戦跡「霊域」めぐりで脚光をあびるような「殉国美談」とは裏腹に，部隊の解散によって棄民と同然化したあげく，それは「犬死に」にほかならぬ非業の死に追いやられたのを思うとき，たとえ「自死」であってもそれこそが「虐殺されたにひとしい惨状というべき真相」に対して目を瞑ってはなるまい（森川，111頁上段・下段）。

→田母神は「日本は第2次大戦前から5族協和を唱え，大和，朝鮮，漢，満州，蒙古の各民族が入り交じって仲良く暮らすことを夢に描いていた。人種差別が当然と考えられていた当時であって画期的なことである」と自画自賛する（田母神，4頁下段）。しかし，その5族協和の中身においての実際は「大和＝1等，朝鮮＝2等，漢・満州・蒙古＝3等」と各民族を格付けしていた。しかも当時，これを当然視した民族観にもとづく日本帝国の植民地経営が，現地に〈画期〉をもたらしていた。憚りなくそう空想するのが「田母神の主張」でもあった。

敗戦後，在日・定住することになった旧植民地出身の人びとおよびその子孫に対する日本国家の法的な待遇は，どうなっていたか？ 彼らもまた，「日本の国のために戦った先人」なのであって，「そして国のために尊い命を捧げた英霊に対し感謝しなければならない」というのであれば（田母神，7頁中段），その感謝されるべき「対象＝集団」のなかには，彼らの多く〔旧日帝のため，戦争の犠牲者となった者たち〕も，当然のこと含まれていなければならない。にもかかわらず，敗戦後になると彼らは長いあいだ無視されてきた。それどころか，日本社会のなかで偏見と差別の〈悲惨な状況〉のなかに放置されてもきた。日本政府はこれを恥じることさえなかった。それは意図的だったゆえ……。

在日外国人〔主に韓国・朝鮮人と台湾人〕はつい最近まで，日本国法務省の某高官にいわせると「煮て喰おうが焼いて喰おうが勝手」な，あわれな存在でしかなかった。田母神が「我が国は満州も朝鮮半島も台湾も日本本土と同じように開発しようとした。当時列強といわれる国の中で植民地の内地化を図ろうとした国は日本のみである」（2頁下段）と自慢したのは，日本国内だけを観察しても分かるように，なにかの「大きな勘違い」である。もともと，論文のなかに誇って書きこむような〈該当する内地化の史実〉はなかった。

## 第5幕 「2008. 11. 5」 ■ 田母神航空幕僚長「最優秀賞論文」の真義（続） ■

◎ 日本はかつて侵略国家であった ◎

### 【田母神航空幕僚長の勉強不足と独善の論調（続き）】

本ブログ「2008. 11. 4」における記述は、① 森川方達『満蒙幻影傳伝説—「聖戦」灰滅史を旅する 亜洲之現場采訪「余録」抄 1993～2004—』現代書館、2005年、に關した部分と、② この森川『著書』からの引照をしながら田母神「論文」を批判した a) b) c) まで、とであった。本日「2008. 11. 5」は、以上につづけて、この②の d) e) f) の記述を展開する。

d) 「李 垠の甥〔日本帝国軍人〕も広島で被爆死した」

李 金禺（3種類の日本語入力ソフトで試したが、この偏と旁で構成されるこの「1字」が出てこないで、その2字分を充てて表記した）は、朝鮮王朝最後の「韓国皇太子」李 垠の甥である。――この甥の李は、1945年8月6日の朝、広島市二葉里の司令部に向かって軍馬で移動中、爆心地付近で熱閃を浴びた。

同日の午後、暁部隊の船艇による搜索の結果、相生橋の橋梁下の水辺にうずくまっていたところを発見されるも、翌日未明、容体が急変して収容先の似島「陸軍検疫所」で死亡した。その遺体はまもなく航空機によって朝鮮へと送還された。専任の御付き武官だった吉成 弘中佐は李 金禺（同上）公の死亡直後、安置された棺のまえで責任をとって拳銃自殺（殉死）を遂げる。

故国に妃を遺したまま、あくまでも「日本の皇族・軍人」であることを強いられ、遙か日本の地で在日同胞2万人を巻き添えにして、大日本帝国陸軍の軍装で馬上に跨がり、無残にも「原爆死」を遂げなければならなかった悲運。なんとも政治的に利用されたあげくのあっけない死であった。同じ末裔でも李 垠のばあい韓国政府は、その死期が迫る寸前まで、けっして帰国を許さなかった。戦後「廃帝」となったのちも日本に在って日本の植民地支配に荷担した過去を本国の同胞からきびしく糾弾された。

隣国「王朝の血脈」は史潮に翻弄され末路、日本の敗戦によって「裏切り者」の烙印を押される。片や死をもって不問に付されるも他方、引責の淵に終生、苦悶しつづける。大日本帝国（皇国）の「覇権」と「聖戦」が隣国同胞に負わせた傷は、ことほどさように深い（森川、531頁上段・下段）。

→田母神は「なんと日本政府は大阪や名古屋よりも先に朝鮮や台湾に帝国大学（※）を造っているのだ。また日本政府は朝鮮人も中国人も陸軍士官学校への入校を認めた」（3

頁中段) と、帝国日本の植民地経営を褒めあげていた (注記) ※ は京城帝国大学と台北帝国大学のこと)。

だが、旧日本軍の将官・佐官などに祭りあげられた朝鮮王族末裔たちの行方は、敗戦後における事実「顛末＝不幸」が端的に指示していた。そもそも、朝鮮や台湾に創設された日本帝国立の高等教育機関における「入学者の実態詳細」〔→日本民族を当然に優先、植民地出身の各民族は断然不利〕をして発言をし、議論をしていたのか？ 現実を語ろうとする人間が歴史に無知であればこそ、論理・理想とは無縁に〈不毛の虚像〉を構築できる。そして、不知はまともな立論の構築を妨げ〈砂上の楼閣〉を夢想させるのである。

d) の 派 論 : 「真の近現代史観」懸賞論文の企図はなにか？

『朝日新聞』2008年11月4日朝刊は『田母神氏が会見「政府見解は検証されるべきだ』』という見出しの記事を報じていた。そのなかで田母神は、「アパグループ」(東京都港区)の第1回「真の近現代史観」懸賞論文に応募し、最優秀賞(懸賞金300万円)を受賞した「論文は本や雑誌の引用がほとんどで独自の研究とはいいがたい」との指摘に対して、こう答えている。

いわく「書かれたものを読んで意見をまとめた。現職なので歴史そのものを深く分析する時間はとれない」。これはまさしく「語るに落ちる」の好例。230編ほどの応募論文があったというが、田母神のそのような論文が「最優秀賞」に選ばれていた。どういう審査基準でその授章を決定したのか評価の方法をしりたい。

『朝日新聞』2008年11月5日朝刊の報道によれば、「防衛省は本省内局、陸海空各自衛隊の全組織を対象に調査している。投稿について上司に連絡や相談した隊員数を調べたところ、これまでに50人以上になったという。空自隊員が複数いるという」。第1回「真の近現代史観」懸賞論文への応募者のうちこの50人以上が自衛隊関係者である事実は、確実になにかを物語っているはずである。

アパグループ《CEO》元谷外志雄(モトヤ トシオ:ペンネーム「藤 誠志」)は、本名の元谷外志雄で『報道されない近現代史－戦後歴史は核を廻る闘ぎ合い－』(産経新聞出版、2008年4月、¥1,575)を刊行している。本ブログの筆者は、この元谷CEOこそ、今回事件を生み出した中心人物であると推定しているが、この判断を下すのにはなにもむずかしい理屈も分析も要らない。ごく単純な受けとめかたである。

元谷は「真の近現代史観」と名づけた、それも、自分のペンネーム「藤 誠志」を冠した懸賞論文を募った。なんのためか？ それによってなんとか、自身が欲しい「社会的な名誉欲」の〈実現〉、つまり藤という、そして元谷という「実業家としての名声」が「知識人としての名声」にまで高められるかたちで、この世に浸透させられうるのではないかと考えた。ともかく、第1回におけるその「賞」においては、航空幕僚長の田母神俊雄の〔正確に言えば単なる文章としか思えない〕『論文』「日本は侵略国家であったのか」を選

んでいた。

ところが、田母神論文の「記述内容」と「その核心の主張」がいかにズサンで時代錯誤であったかが、今月になるや一斉にマスコミが報道する事態となった。もちろん、元谷CEOの気持からすれば、自分の氏名（ペンネーム）を冠した懸賞論文「授受章」騒ぎで、世間に自身の名声が轟いた効果には満足してよいと思われる。けれども、その効果は逆効果ともいふべき反響を呼んでおり、あわせてきびしい批判も受けるハメになっている。「文民統制」に関連する問題も惹起させていた。

今回の、田母神論文への授章『事件』によって、元谷が「報道されない近現代史」だ〔著作の主題〕と嘆いていた「戦後歴史は核を廻る闘ぎ合い」〔著作の副題〕に関連する「一定の論点」、それもかなり「低次元のやりとり」：「植民地支配はよいこととした」だの「親日だの反日」だのそれらが、「真に報道された」効果は大きい。だが同時に、論文と称するにはずいぶんおこがましい、やはり低水準な中身だった「田母神のその文章」のズサンさを際立たせてしまった今回の事件は、元谷に対しては好ましくない結末をもたらしたはずである。

なにせ、アパグループ《CEO》元谷外志雄に対して日本のマスコミは、関連する報道において「なんら遠慮する必要を感じない」のだから、実質ではボロクソとっていいくらい糾弾するかのよう（今回の事件）を報道している。ただし、元谷外志雄は有名になった。これは彼にとっては、とてもいいこと……。

#### e) 「昭和天皇の死去」など

森川方達『満蒙幻影傳説』にもどろう。――軍部の暴走（戦争政策推進）を「無条件降伏」決断まで容認しつつ、敵国アメリカの暴挙（原爆投下による虐殺および無差別戦略爆撃）のまえに屈した、大元帥陛下としての責任にはいっさい口を噤んだ（「極東国際軍事裁判」において免責された）まま、ついに昭和天皇裕仁は1989年、この世をさった（崩御）した。行年、87歳（森川、532頁下段）。

結末、「神州不滅」は幻影だった。だがしかし「国体ハ護持サレタ」……。サダムとヒロヒトのちがいはそこにある。そして滅亡の淵に立つ神州「侵略者の国」へと侵攻・占領したアメリカの打算に乗るか、反るか。戦後半世紀を遙か経ても、なおもその「属国」路線を歩むニッポンは断乎として封印したはずの「戦争への扉」を、ついに国是「戦争放棄」の基本理念を有名無実、ないがしろにして、こじあけてしまった――あげくには「有事法案」の与野党結託による打算的「成立」によって、これを追認するにいたる――誇りなき「日本国」のぶざま。

絶え間なくつづく“情報戦”渦中、殺戮と破壊の連鎖は「戦争支持」を打ち出した日本国政府の恐るべき“失政”がこれを翼賛して、報道管制のすき間から覗く“残虐”シーンが日々繰り返され、戦場の空を焦がし、死地の暗雲が頭上にたれこめている。小

泉政権は、米国に追随して世論を黙殺した。固唾を呑んで全世界が中止するなかで軽挙妄動、日本国の「戦争支持」は表明された。

f) 「21世紀アメリカ帝国の挫折 アンド 20世紀日本帝国の失敗」

「イラクに自由！」との独善的「大義」をかかげて軍事侵攻した米英の仕業は、とりもなおさず「欧米列強からのアジア（東洋）の解放」をうたった、かつての「皇國日本」を彷彿とさせる。「解放と独立」は20世紀のアジア同胞にとって悲願であった。日本が挫折した最大の原因は「神國日本をその盟主」として、この地域に君臨するビジョンを描いたことにある。そして、ついには「大東亜共栄圏」——とてつもなく広範囲にわたる「アジア・太平洋地域」の権益死守をもくろんだ「対米戦争」へとつながる。

日本政府が「高度攻防国家」建設を標榜した最優先の「国益」からすれば、それは国家存亡の大博打に賭した意思につらぬかれて「日米開戦が止むをえざる選択」だと仮に、そうだったとしても、大日本帝國の意思は、アジアの支配者となる野望を抱いて近隣諸国への侵略を拡大し、そこで「収奪した権益を守る」ためにする、みずからが仕掛けた「自衛」戦争——「先制攻撃」であったことを、よもや忘れてはなるまい。日本に掠めとられることの屈辱に対し、これを民族の魂が拒絶して中国「国・共」勢力は一致。合作して「抗日」闘争を展開する。そのとき日本は国際社会から完全に孤立した（以上、e)の後半からつづいて、森川「あとがき」にかえて、618頁）。

→田母神は、旧日帝時代において、朝鮮出身の陸軍中将「洪 思翊（ホン サイク）」、陸軍大佐「金 錫源（キン ソグォン）」が輩出していた事実を挙げて（田母神、3頁下段）、いわゆる〈創氏改名〉（昭和14：1939年）が日本軍のなかではなかったかのように強調している。けれども、特殊な事例を針小棒大に指摘する論法は説得力がない。朝鮮人の兵卒たちはみな、日本式の氏名を強要された（下のピラは、<http://ja.wikipedia.org/wiki/創氏改名>より。少しみづらいが「創始改名」を奨励する中身である）。



日本軍の性的奴隷にされた女性〔従軍慰安婦〕たちに対しては「日本女性：大和撫子」風の氏名も付けられていた。性的奴隷の女たちも無理やりに「ニッポン将兵たち：日帝好みの源氏名にさせられていた」のよ！

海野福寿『韓国併合』（岩波書店、1995年）はこう批判する。

日本の朝鮮支配全体の責任が問われるのは「植民地」支配そのものが正当性・道義性を

欠き、「従軍慰安婦」や強制連行問題を惹きおこしたという歴史的事実においてである。日本が謝罪を求められるのは、個々の不法行為に対してではなく、朝鮮民族をまるごと支配した愚劣な行為に対してである。だから、問われているのは日本人のモラルの再生状況なのである（「あとがき」243頁）。

## 第6幕 「2008. 11. 7」 ■ 田母神航空幕僚長問題 ■

◎ 「アパグループ」第1回「真の近現代史観」懸賞論文の基本性格 ◎

【航空自衛隊幕僚長とA P AグループCEOの異常接近（ニアミス）】

### ① 2008年11月6日中に記述した田母神航空幕僚長問題

asahi.com「2008年11月6日11時14分」は「前空幕長投稿の懸賞、空自78人も論文 総数の3分の1」と報じた。

航空自衛隊の田母神（たもがみ）俊雄・前幕僚長（60歳）＝3日付で定年退職＝が日本の侵略などを正当化する論文を発表して更迭された問題で、防衛省は11月6日、航空自衛官78人が田母神氏と同じ懸賞論文に投稿していたことを明らかにした。応募総数は235人で、その約3分の1を航空自衛官が占めていたことになる。民主党外務防衛部門会議で報告した。

防衛省の説明によると、ホテルチェーンなどを展開するアパグループ主催の「真の近現代史観」懸賞論文の募集が始まった今年5月、航空幕僚監部教育課が応募を全国の部隊に呼びかけた。その結果、最優秀賞に選ばれた田母神氏を除いて航空自衛官78人が上司に届け出たうえで投稿。いずれも入賞はしなかった（註記：ただし最優秀賞には田母神航空幕僚長が選ばれていた）（<http://www.asahi.com/national/update/1106/TKY200811060091.html>）。

既述だが、「真の近現代史観」懸賞論文を主催したA P AグループCEO〔代表取締役〕の元谷外志雄は、航空自衛隊小松基地金沢友の会会長を務めている。この「真の近現代史観」懸賞論文への応募者235人のうち「約3分の1の78人」すべてを航空自衛官が占めていた。しかも、そのうち「さらに62人」が田母神が以前トップを務めた第6航空団（石川県小松市）の所属だった。ここに「なんらかの符合・特定の現象発生」を推理したくなるのは自然、不可避ある。

――航空自衛隊幕僚長という軍隊〔自衛隊〕の地位は、通常使われる階級名「大将」に相当する。どういうわけか、今回の懸賞論文に応募した「佐官・尉官・曹」クラスからは1名も受賞者が出ていない。

受賞者の総数13名、これを応募者総数235名で割ると約5.5%、おおよそ応募者20名につき1名が授章されている。だが、応募者総数の約3分の1を占めていた航空自衛隊関係者

は、田母神空幕僚長以外、誰1人受賞しなかった。仮にきわめて単純に思考するが、今回の懸賞論文の応募者のうちに4名くらいは航空自衛隊関係者が含まれていてもよかつたはずである。ともかく、田母神以外の空自隊員は全員「選に漏れている」。もしかすると、航空自衛隊関係者が応募した論文は、あまり出来のよくないものばかりだったのか。また「佳作」を受賞している諸橋茂一は、KBMという会社の代表取締役である。この会社：KBMは石川県金沢市にある。

――「2008/11/05」の時点で、「この懸賞論文の受賞者を確認してみる」といって調査した「2ch.」氏は、つぎのように報告している。アパホテルは航空自衛隊の〈天下り先〉企業にもなっている(<http://mamono.2ch.net/test/read.cgi/newsplus/1225886550/401>)。

☆「最優秀藤誠志賞」（懸賞金300万円・全国アパホテル巡りご招待券）

田母神俊雄（航空幕僚長）

☆「優秀賞」（懸賞金30万円・全国アパホテル巡りご招待券）2名

〔社会人部門〕 ・落合道夫（近現代史研究家）

→東京近現代史研究所主宰 <http://www3.plala.or.jp/kyokinken/>

〔学生部門〕 ・多田羅健志（大学生）

☆「佳作」（懸賞金1万円・アパホテル全国共通無料宿泊券）10名

・岩田 温（拓殖大学日本文化研究所 客員研究員）

→日本保守主義研究会 代表

<http://www.wadachi.jp/>

・江崎 京（パートタイマー）

・姜 永根（株式会社淡海環境デザイン：代表取締役）

・木下雅敏（アパ株式会社：リスク管理室室長）

→平成20年定年退職自衛官リストに名前あり

最終階級 一海佐

<http://www.dsimil.com/library/topix/tpxj.08.taikan.htm>

・志川 久（会社員：建設会社勤務）

・出野行男（日本語講師：中国在住）

→自著『中国の守銭奴』出版希望中

[http://www.alphapolis.co.jp/dream.php?ebook\\_id=1072148](http://www.alphapolis.co.jp/dream.php?ebook_id=1072148)

・原子昭三（無職：中学教師24年、弘前市議20年）

→『東京裁判の亡霊を撃て』『世界史から見た日本天皇』『満洲国再考』著者

・三好 誠（不動産賃貸業）

→『はめられた真珠湾攻撃』著者

・諸橋茂一（(株)KBM 代表取締役社長）

→小松基地友の会事務局長

<http://www.jasdfmate.gr.jp/gongo.html>



→なお、この諸橋が応募した懸賞論文の全文は、

<http://www.kbmgroup.co.jp/kyouiku/pdf/siryoku-200711.pdf>

に出ている。

・渡辺映典（大学生）

「2ch.」への「書込」には信用ならない記述も多いけれども、またべつの「2ch.」氏は『『侵略戦争は濡れ衣』の論文で自衛隊を追われた田母神敏雄・前航空幕僚長（60歳）』は、「論文を募集し、田母神氏に「最優秀賞」を授与したアパグループの代表（65歳）とのズブズブの関係が明らかになった。なんと、昨〔2007〕年8月に石川・小松基地でF15戦闘機に搭乗させたというのだ。民間人の搭乗は初めて。高額な燃料はすべて税金。賞金300万円の謝礼ということはないのか」という疑問を投じている（<http://mamono.2ch.net/test/read.cgi/newsplus/1225906922/150> 下の写真は、[http://www.mod.go.jp/asdf/equipment/01\\_f15.html](http://www.mod.go.jp/asdf/equipment/01_f15.html)）。



「2ch.」氏がいうみたく、最新鋭の戦闘機に搭乗させてくれた「謝礼賞金：300万円」なのであれば、これは、軍人が国家の兵器「戦闘機F15」（航空自衛隊の主力戦闘機として約200機が配備されている：最大速度 マッハ約2.5）の飛行体験をさせた民間人から、「懸賞論文」の媒介という、公募的ながらも「個人的と映る経路」をとおしてその300万円を獲得するとい

う関係は、片や国有財産の恣意・不正的な使用、片や不適當な関係での金銭授与を想像させないか？

ここまで話がすすむと、「両者〔田母と元谷〕の関係の親密さ」を背景とする「田母神の懸賞論文：最優秀賞」が『〈ヤラセ〉の出来レース』なのではなかったか、という疑問は濃厚となる。

なお、諸橋茂一の佳作「論文：『真の近現代史観－『日本人としての自信と誇りを取り戻そう！』』も（前掲のHPにはリンクあり）、論文の体裁を必要かつ十分に備えているとはいえない。既存の関連文献を読書したのちの「単なるとりまとめ」「自分なりの咀嚼」を示しえた水準に留まっている。どだい陳腐な中身なのである。おまけに、諸橋は「参考文献」を多数枚挙していてもその著者と書名だけを一覧するだけで、それぞれの出版社や発行年を出していない。くわえて、本文にそれらの文献から引用箇所が明示される形式にもなっておらず、「論文」と称するにふさわしい最低限の要件を整えることができていない。今回「懸賞論文審査委員長」上智大学名誉教授渡部昇一の「審査の方法」に対しては重ねて一定の疑念が生じる。

## ② 2008年11月7日の報道に関して記述した田母神航空幕僚長問題

『朝日新聞』2008年11月7日朝刊は「小松基地，同テーマで論文指導 田母神氏は応募薦める」との見出しで、つぎのように報道している。

航空自衛隊の田母神俊雄・前航空幕僚長（60歳）＝3日付で定年退職＝が日本の侵略などを正当化する論文を発表し、更迭された問題で、空自小松基地（石川県小松市）の第6航空団が、田母神氏が応募した懸賞論文と同じテーマ「真の近現代史観」で幹部隊員に論文指導をしていたことが6日、防衛省の調査で分かった。

田母神氏は1998～1999年に小松基地トップの司令を務め、今回の懸賞論文では空自内で応募を勧めていた。懸賞論文には田母神氏以外にも航空自衛官78人が応募。62人は第6航空団の所属で、大半は尉官クラスの若手幹部だった。懸賞論文は、ホテルチェーンなどを展開するアパグループの主催。

グループ代表の元谷外志雄氏の著書『報道されない近現代史』の出版を記念して創設された。本は「鬱積る愛国，憂国の思いを，半ば書き下ろした」と書き、懸賞は「独自の近現代史観で日本の活性化に役立つ論文を」と呼びかけた。元谷氏は小松市出身で「小松基地金沢友の会」会長。田母神氏は第6航空団司令の時に知りあったとされる。

防衛省によると、募集が始まった5月、新聞広告で気づいた航空幕僚監部教育課が「自己研鑽のためになる」として全国の隊員に呼びかけた。同航空団ではこの時期、幹部を対象に論文指導をすることになっており、担当者が懸賞論文のテーマを指導の課題に引用したという。小松基地によると、懸賞論文の締め切り間際に、航空団として応募に向けた論文審査もしていた。空自関係者によると、各部隊では年1～2回、勤務以外の時間に、自己研鑽で幹部に論文を書かせている。

同上朝刊は「社会面」で「アパ代表と親交10年 前空幕長，小松基地時代から」という見出しの記事のなかで、こう報じてもいた。

親交は田母神氏の転勤後も続いた。アパグループが発行し、経営するホテルにも置かれている雑誌『アップルタウン』の連載企画と、元谷夫妻が政財界の要人と懇談する「日本を語るワインの会」のコーナーに田母神氏が数回参加。今年6月に開かれた元谷氏の著書『報道されない近現代史』の出版記念パーティには、田母神氏が制服姿で出席した。元谷氏は2007年8月、小松基地では民間人としては始めてF15戦闘機に体験搭乗。その時の写真は元谷氏の著書に収められている。航空幕僚監部広報室は「広報活動の一環として、小松基地金沢友の会の会長として搭乗してもらった」と説明する。

以上の記事はさらに、「元谷氏は朝日新聞社の取材に対し、田母神氏の論文の応募を依

頼したことはないと説明している。『毎月送っているアップルタウンの告知で気付いたのではないか。まさか航空幕僚長が応募してくれるとは思わなかった』と、元谷が答えたと報じている。ともかく「応募を依頼した事実はなかった」と元谷がいうわりには、「田母神がわ」が、今回「元谷の会社：アパグループ」が公募した懸賞論文に応じた航空自衛隊関係、それも田母神が勤務していた小松基地関係を中心に航空自衛隊員からの応募がその約3分の1も占めていた。これらを〈単なる意図的な偶然とみる〉のは、かなり不自然というか無理がある。なお、応募総数はこのインターネットの時代にたった235編。

航空自衛隊は、航空幕僚監部教育課が「自己研鑽」のために全国の隊員に今回の懸賞論文への応募を呼びかけ、第6航空団ではこの時期、幹部を対象に関連の「論文指導をする」といっていた。はたして「論文を隊員に執筆させる」自衛隊の立場というものは、隊員たちに「言論や思想、表現の自由」を前提にしての〔できる〕ものといえるか？「国家の立場」で軍隊に勤務する特別職の公務員たちの問題であり、「画然たる制約」や「表現しがたい限界」が発生する。それとも元谷の意に即する論文を狙って書かせるのだから、その心配はないといえるのか。

## 第7幕 「2008. 11. 8」 ■ 田母神航空幕僚長問題のその後 ■

◎ 田母神〈前〉航空幕僚長に政治思想ありや ◎

### 【田母神俊雄幕僚長とA P Aグループ代表元谷外志雄の親交】

A P AグループCEO〔代表取締役：元谷外志雄〕の第1回「真の近現代史観」懸賞論文に応募し、この最優秀賞を受賞した田母神俊雄〔前〕幕僚長に関しては、本日（11月8日）になると、さらに新しい事実が報道されている。これを紹介・論評する記述をおこないたい。

1) 航空自衛隊からの応募者総数がさらに増えた。――防衛省は11月7日、新たに16人の航空自衛隊員がアパグループの同じ懸賞論文に投稿していたことを明らかにした。これで空自からの投稿者は94人となり、投稿者全体の4割を占める（『朝日新聞』2008年11月7日夕刊）。これでは、あたかも「航空自衛隊員向け」に設けられた懸賞論文のタイトルが「真の近現代史観」だったと解釈されてもしかたない。

いまどきの時代における「懸賞論文の『公募』」である。インターネットで広く社会に向けて論文を募集することが可能である。世界中から応募があつて当然。実際、中国居住の日本人が「佳作」に当選している。外国人あるいは外国籍人からの応募はなかったのか。いずれにせよ、応募論文の数そのものがもっと多くあつてよかつたと観察されて当然。だが、その総数は235編であつてそれほど多くなかつた。なぜか。――人気になつたのか。応募期間が短かつたのか。そのへんに関する推理・憶測はあれこれ可能。

2) 田母神が幹部自衛官を教える統合幕僚学校の校長だつたころ、空自幹部らが購読する雑誌『鵬友』2004年7月号に掲載された田母神の文章は、「これまで我が国では反日的言論の自由は無限に保障されていたが、親日的な言論の自由は極めて限定されていたような気がする」「(南京大虐殺が) 無かつたことが真実であることは今では十分すぎるほど分かっている。その意味で我が国にもようやく本当の民主主義の時代がやつて来たと言えろ」と主張していた（『朝日新聞』2008年11月7日夕刊）。

田母神は「南京大虐殺事件（1932年12月13日から）」の真相に迫る本格的に研究をおこなつた専門家の学術書が、しかもその虐殺者数の計算において種々の異見が披露されるかたちで、これまで数多く公表・出版されている事実を知らないのか。田母神がA P Aグループ「懸賞論文」で最優秀賞を受けた直後、その真相解明に従事した歴史学者の1人であり、どちらかというとその犠牲者数をなるべく少なめに見積もる代表者の秦 郁彦でさえ、田母神「論文」の『無知＝噴飯物「性」』を批判していた。

現東京都知事である人物はいまも小説家でもあるが、南京事件において虐殺は存在しなかった＝「フィクション（小説?）」だと発言し、物笑いの種を提供したことがある。少なくとも南京「大虐殺事件」に関して「日本軍に中国住民が殺されていない」と主張することは「真の近現代史観」に完全に反する歴史認識である。

各種の議論が盛んになされてきている「南京大虐殺事件の様相」に対して、田母神のように「全面否定する見解」、それもなんら学問的な裏づけもなく単純に「私は否定する」というふうに口出しをするのは、間違えている。

場末の一杯飲み屋でオダを上げながらする空自幹部のそれならともかく、国家的に重要な責任の立場にある人間：軍人が、なんの根拠もなしに「自分の信じたいこと」だけを、それも日本国政府の公式見解に逆らいながら公表するわけにはいかない。

さきの人物：石原慎太郎はテレビ発言・その他さまざまな場、たとえば『月刊プレイボーイ』誌（日本版）1990年11月号などで「南京大虐殺はウソだ、なかった」と述べたことがあった。石原は南京大虐殺について自分では一度たりとも取材したことがない〔取材する能力もない〕ままに、日本を世界の孤児にする売国的“右翼”の虚言を受け売りしているだけ・・・（本多勝一「石原慎太郎の人生」『週刊金曜日』2000年7月7日、No. 322号。引照は、[http://www1.odn.ne.jp/kumasanhouse/hinkonnaru\\_seisin/k121.html](http://www1.odn.ne.jp/kumasanhouse/hinkonnaru_seisin/k121.html)）。

ノンフィクション作家である石原に向けてこのような批判が投げられても「カエルの面になんとか」かもしれない。田母神のばあい、素人的な意見で「南京事件＝日本軍による大虐殺はなかった」と主張することで、自分の勉強不足を棚上げするどころか、自身の「無知さ加減にさえ無知」な「教養を欠いた軍人」の立場を暴露した。いまだき「親日だ、反日だ」などといいいながら「南京事件を否認する」という、まことにお粗末な、「見解ともいえない」ような「素朴な気持の披露」は禁物である。

田母神は多分、航空自衛隊の最上位を占めた軍人として「親日」の立場と思われる。だが、今回の「懸賞論文」に書いた主旨は、現状における日本国家の立場に対して「反日」の考えを明示した。「思想の気に入らない相手」に対して「反日」の符牒（レッテル）を貼りつけ、排除しようとする思考方式が実は、『「親日」対「反日」の基軸』〔判断基準〕をどこに設定すればよいのか、まだよく分っていないのである。「親日」である自身の思想に反対する者は「反日」だと決めつけるのに急なあまり、その単純明快だがまったく「意味不詳の定理関係」を、他者に納得させることができないでいる。

――ちなみに、前出の秦 郁彦は「近現代史の研究者として自覚のない秦 郁彦氏の劣化ぶりには目を覆いたくなります」（<http://dj19.blog86.fc2.com/blog-entry-168.html>）註記とまで非難されている。研究者としての立場に関してそのように指摘された変移は、彼の公表する研究「業績の劣化」を指摘したものである。

3) 11月7日、「公然わいせつ：空自3佐，全裸でコンビニに入店 停職10日処分」という報道がされた。宮城県警石巻署の調べや基地の説明では，その3佐は9月5日午前2時半ごろ，全裸で財布をもって同市内のコンビニに入店し，女性用下着とストッキングを1点ずつ購入して店内から出たところを，店員の通報で駆けつけた石巻署員にみづかり，署で取調を受けたという。

本ブログ「2008.11.3」でも触れたように，航空自衛隊の軍人体質は「勇猛果敢・支離滅裂」であり，田母神（前）航空幕僚長はその典型的な人物だと指摘されていた。

『日本経済新聞』2008年11月8日「春秋」欄は，航空自衛隊のホームページにみられる「『空』での優位は戦いの行方を決する」という発言に言及して，たしかに「有事に直面したとき，カギになる」「制空権」の「その重い役割をうたって意気も高い」「『航空優勢』と称する」ところの，航空自衛隊の元気よさに論及しつつも，「社会面の片隅に困った記事を見つけた。宮城県で3等空佐が酔っぱらった揚げ句，全裸でコンビニに入りこんだというのだ。空自では意気の示しようも様々らしい」と皮肉っていた。しかし，この日経のコラムは当の3佐が「女性用下着とストッキングを1点ずつ購入」した点には直接触れていなかった。

## 第8幕 「2008. 11. 9」 ■ 文民統制など屁の河童：田母神「論文」問題追論 ■

◎ 田母神「論文」の主張内容は穴だらけ ◎

【議論のすべてが反論などを予定しない勝手かつ稚拙な論旨】

### ① 「〇〇賞」に値する文章だったか？

『学術的な論文』というにはほど遠い田母神俊雄前航空幕僚長の文章「日本は侵略国家であったのか」を、あらためて「リンクを張った」[以下のアドレス](#)に紹介しておく。この田母神「論文」は、日本国の「政治側の怠慢」状況を示唆しただけでなく、「文民統制の破壊」につもながる「武力を保有する軍人」の危険な内容を示していた。

[http://www.apa.co.jp/book\\_report/images/2008jyusyou\\_saiyuusyuu.pdf](http://www.apa.co.jp/book_report/images/2008jyusyou_saiyuusyuu.pdf)

もっとも、この「論文」はきわめて幼稚な立論の展開であって、いちいち反論するにはあまりにバカバカしい。それに、実際に反論をくわえることにすれば、けっこうな分量での記述を費やさねばならないので、ここではひとまず禁欲する。田母神「論文」の一部分に関した〈筆者の分析・批判〉はすでに、[本ブログ](#)「2008. 11. 1」以降においてあれこれ開陳してきた。興味ある読者は面倒でも再度そちらを参照してほしい。

繰り返かえしていう。この程度の「論文」に懸賞、それも〈最優秀賞〉を授け、賞金300万円を出そうとした会社社長の基本的な学識を疑っても詮ないことである。参考にまで挙げると、経済学・経営学部門での権威ある『日経・経済図書文化賞』は、こういう主旨になっている。なかでも賞金額を比較してみるといい。

経済および経営・会計分野の学問、知識の向上に貢献するとともに、その一般普及・応用に寄与することを目的として、昭和33年に設立しました。著者および出版社を表彰します。賞（5点前後）／賞金100万円と副賞（記念品）を著者へ。特に優れたものがあれば特賞（賞金150万円と副賞）とします。受賞図書を刊行した出版社へ賞牌を贈ります。

全国でホテルなどを展開する「アパグループ」（東京都港区）の代表取締役社長：元谷外志雄（もとや としお）が準備・発足させた第1回「真の近現代史観」懸賞論文〔最優秀賞（懸賞金300万円）〕を、これからにおいてより権威ある冠賞にしたいのであれば、狭い身内の「毛繕い集団」でしか共通の認識に達しえない諸「論文」ばかり集めて「〇〇賞」を授章することを止めなければならない。

A P A代表「元谷好みの論旨」を内容とする「論文」ばかりで、それもお粗末すぎる（文章）をかき集め、これに自分のペンネームを関した「〇〇賞」を創設して世に送りだしても、たいした社会的評価はえられない。もっとも、今回の事件化によって、元谷とA P Aグループの存在は非常に有名になった。宣伝料としてみればずいぶん得をしている。

## ②「〇〇賞」が創設された経緯

あるとき、「金儲けに成功した経営者」が、こんどは「自分の名誉欲を満足」させたくなった（マズロー「心理学」の理論どおりに）。そこで、自身の筆名「藤 誠志」を冠した「〇〇賞」を置き、とりあえず知りあいの親しい田母神俊雄航空幕僚長に「〇〇賞」と賞金を与える経緯になっていた。

ところが、この賞の授受をマスコミ関係に「通知・公表」したのを契機に「トンデモ〔ない〕の内容」を記述するその「田母神の文章」は、11月1日以降、新聞などにおいて盛んに報道され、しかも目茶苦茶叩かれた。それこそ、立つ瀬もないくらい批判された。というのも、その「中身」にはズサンな主張がテンコ盛りされているだけでなく、軍人として守るべき「文民統制」の立場が忘れられたことを証する文節も含まれていたからである。

『朝日新聞』2008年11月8日「社説」は、田母神「論文」をこう批判している。その一部を紹介する。

そもそも自衛隊は、大日本帝国の日本軍が果たした役割への反省を踏まえ、平和憲法にもとづく民主主義国家の独立と平和の守り手として発足した。精強でなければならないが、意識において旧軍の負の遺産とは明確に断ち切られている必要がある。

自衛官ならなおのこと、歴史認識などバランスのとれた教養と正確な知識、民主主義社会における文民統制のあり方などがきちんと教育されなければならない。組織の外と触れ合い、平衡感覚を磨くことも大切だ。

つまり、田母神の論述は「過去の負の遺産に対する反省」がなく、また「均衡のとれていない歴史認識」をもって「不正確な知識」を振りまわしていた。問題なのはとくに「文民統制」の「意識を欠落」させていたことである。くわえて、こんな軍人を海空自衛隊の最高司令官に任命していた、防衛省など「関係当局と任命権者」の責任も問われて当然である。

しかし、政権党であるとりわけ自民党の議員のなかには、田母神とまったく同一の考えである人間がいくらでもいる。田母神も、今回の「この〈所感〉程度のことを文章化し、主張したところで、どうということもあるまい」と軽く考えていたはずである。というの



も、政権をにぎっている自民党内には〈同意見の議員〉も少なからずおり、彼らは実質的には田母神を支持しているからである。

### ③「村山談話」1995年の意味

しかし、主に自民党を中心とする歴代の〈日本の政権〉といえども、わけても『村山談話』〔村山内閣総理大臣談話：「戦後50周年の終戦記念日にあたって」1995年8月15日〕に提示された「旧日本帝国の戦争責任」に関する、公式の「政治的な認識」の立場は無視できない。田母神はだから、今回の「論文」公表後にただちに更迭された。

村山談話の後半部分は、こう語っている ([http://www.mofa.go.jp/MOFAJ/press/danwa/07/dmu\\_0815.html](http://www.mofa.go.jp/MOFAJ/press/danwa/07/dmu_0815.html))。

いま、戦後50周年の節目に当たり、われわれが銘記すべきことは、来し方を訪ねて歴史の教訓に学び、未来を望んで、人類社会の平和と繁栄への道を誤らないことであります。

わが国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。

私は、未来に誤り無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします。また、この歴史がもたらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を捧げます。

敗戦の日から50周年を迎えた今日、わが国は、深い反省に立ち、独善的なナショナリズムを排し、責任ある国際社会の一員として国際協調を促進し、それを通じて、平和の理念と民主主義とを押し広げていかなければなりません。同時に、わが国は、唯一の被爆国としての体験を踏まえて、核兵器の究極の廃絶を目指し、核不拡散体制の強化など、国際的な軍縮を積極的に推進していくことが肝要であります。これこそ、過去に対するつぐないとなり、犠牲となられた方々の御霊を鎮めるゆえんとなると、私は信じております。

「杖るは信に如くは莫し」と申します。この記念すべき時に当たり、信義を施政の根幹とすることを内外に表明し、私の誓いの言葉といたします。



この村山談話は、あのアジア・太平洋戦争が近隣のアジア諸国の人たちだけでなく、「日本帝国じたい」が、そして交戦国のアメリカも日本・日本人・日本民族などに与えた大きな損害と不幸と悲惨をも思い、反省する文章である。いまさらのように『軍艦マーチ』に勇ましく乗ってか、あの戦争で「日本国はなにもやましい行為を犯していなかった」「侵略国ではない」などといえるほど、政治的感覚を重度にマヒさせた〈能天気な空軍将官〉がいまだ航空自衛隊にはいる（写真は、<http://www.kantei.go.jp/jp/rekidai/kakuryo/81.html>）。

〔参考〕 軍艦行進曲「歌詞」（ぐんかんこうしんきょく：軍艦マーチ，1900〔明治33年〕初演）

1. 守るも攻むるも黒鉄（くろがね）の  
浮かべる城ぞ頼みなる  
浮かべるその城日の本の  
皇国（みくに）の四方（よも）を守るべし  
真鉄（まがね）のその艦（ふね）日の本に  
仇なす国を攻めよかし



戦艦大和 - 1941年10月30日撮影 -

2. 石炭（いわき）の煙は大洋（わだつみ）の  
竜（たつ）かとばかり靡（なび）くなり  
弾撃つ響きは雷（いかづち）の  
声かとばかり響（どよ）むなり  
万里の波濤（はとう）を乗り越えて  
皇国（みくに）の光輝かせ

この軍艦マーチは「太平洋戦争中に盛んに演奏され、昭和16年12月8日の日米開戦時にも繰り返され、ラジオから流された」。「旧日本海軍及び現在の海上自衛隊の公式行進曲で、進水式などで演奏される」。

――単純な解釈をくわえておく。1番の歌詞：「皇国の四方を守るべし」とは〈防衛〉を意味し、2番の歌詞：「皇国の光輝かせ」とは〈侵略〉をするか？ もっとも「攻撃は

最大の防御」だというからその区分は曖昧化する。

現在の自衛隊3軍においてはおそらく、田母神個人と彼の「論文」に限らない問題がまだある。防衛大学校の教育はどうなっているか？ 「文民統制」をきちんと教えているか。軍隊は、戦争事態の戦闘場面になったらやってもいい「合法的な人殺し：破壊」の方法を教える国家組織である。発展途上国でよく起きるクーデターは、軍部によるものがほとんどである。もとより「文民統制」の基本理念とはなじみにくい組織の特性を有せざるをえないからこそ、この理念「文民統制」を一貫して執拗に教えねばならない。

**【2008年11月9日 公開】**

## 第9幕 「2008. 11. 10」 ■ 日本帝国の植民地に設置された帝国大学 ■

◎ 日本帝国は植民地のために「善いこと」をした？ ◎

### 【現地のためではなかった高等教育機関の創設】

田母神俊雄前航空幕僚長は、APAグループ〔代表取締役社長：元谷外志雄〕の第1回「真の近現代史観」懸賞論文に応募し、この最優秀賞を受賞した論文「日本は侵略国家であったのか」において、こう主張した。

「我が国は満州や朝鮮半島や台湾に学校を多く造り現地人の教育に力を入れた。道路、発電所、水道など生活のインフラも数多く残している」。なかでも「1924年には朝鮮に京城帝国大学、1928年には台湾に台北帝国大学を設立した」。「日本政府は明治維新以降9つの帝国大学を設立したが、京城帝国大学は6番目、台北帝国大学は7番目に造られた。その後8番目が1931年の大阪帝国大学、9番目が1939年の名古屋帝国大学という順である。なんと日本政府は大阪や名古屋よりも先に朝鮮や台湾に帝国大学を造っている」（田母神稿、3頁中段）。

### ① 満洲医科大学－後藤新平の政策的指導－

ここに、軍医学校跡で発見された人骨問題を究明する会編、講演／末永恵子『戦時医学の実態』（樹花舎、2005年）がある。本書は、満鉄（南満洲鉄道株式会社）が1911〔明治44〕年旧奉天（現在の瀋陽市）に創設した医学校、南満医学堂を前身とする満洲医科大学（1922〔大正11〕年に大学へ昇格）をとりあげている。



南満医学堂の設立目的は、日中両国の学生に医学を教え、大陸で活躍する医師を要請することにあつた。その発案者は初代満鉄総裁の後藤新平である。社会衛生学者でもあつた後藤は、植民地台湾において台北医学校を創設した。

後藤は、つぎに満洲で南満医学堂を創設させた結果を評して、「台湾の統治を助けるに重大の効果があつたと同様に、やはり今度満洲に於いても非常の効果を挙げて居る」、「文装的の意味を以てある好武器をとりて侵略すると云うことは、植民地政策の甚だ必要なることで、あの土地の永久占領の上に基礎を置くには有力のものであり」と語っている（前掲『戦時医学の実態』10頁）。

後藤新平は、医学の恩恵を現地人にほどこすことで、日本による支配を正当化する。医

学普及の目的は中国人を懐柔するためと規定していた。このように「満洲医科大学の原点にはこのような植民地政策の手段としての医学・医療観があり」、「植民地医学の中国東北部におえる拠点が満洲医科大学であった」(11頁)。

満洲医科大学の学生数を分類すると、下記のようになっていた(11頁)。この数値においては、各「部・科」にそれぞれ不均衡に収容されている、日本人と満洲国人〔主に中国人、そして朝鮮人、さらにそのほか民族・人種なども入っている〕の学生数に注意したい。この統計を介して、満洲医科大学生にまつわる「特定の傾向」および「各種の差異」を読みとることが可能である。

部・科(修業年限)	日本人学生	満洲国人学生	合計
「学部」(4年)	258名	29名	287名
「専門部」(4年)	0名	137名	137名
「予科」(3年)	183名	57名	240名
「附属予備科」(1年)	0名	46名	46名
総計	441名	269名	710名

末永恵子『戦時医学の実態』は、戦前に公刊された鶴見祐輔編著『後藤新平 第2巻—1937~38年』後藤伯爵伝記編纂会、〔全4巻、昭和12-13年〕を参照している。筆者の手元にあった鶴見祐輔『〈決定版〉正伝・後藤新平4—満鉄時代—1906~08年』(藤原書店、2005年)は、こう記述している。

後藤新平「伯のいわゆる『文装的武備』の政策は、旅順工科学堂〔のちの旅順工科大学〕についてこそ、十分に実を結ばなかったけれども、南満医学堂、中央研究所、東亜経済調査局その他において、燦然たる光を放つようになった」(321頁)と論述している。「なかにもいわゆる『文装的武備』に、靦面(てきめん)の効果をおよぼしたのは、奉天における南満医学堂であった」と、『満鉄十年史』に記された同旨を指摘しつつ、誇っていた(323頁)。

満洲医科大学では「生体解剖」がとくに太平洋戦争中おこなわれていた。「1942年秋から1943年にかけて、5回前後生体解剖がおこなわれた」という証言がある(『戦時医学の実態』10頁)。満洲医科大学のこの問題が戦後とりあげられ、社会的審判を下されることもなく、日本の医学界も戦時中のそうした非人道的研究を問題にせず、研究者自身も口を閉ざし、関連する業績を隠蔽してもきた。しかし、全国学会誌や専門の商業誌に掲載された論文じたいは抹消できない(31頁)。

満洲医科大学の研究者の一部は、関東軍・満洲国軍・監獄・日本領事館の関係者らに研究の必要上接近して、日本の植民地政策に便乗し、軍事侵攻を利用してそれらの国家機関から協力をえながら医学研究をすすめており、この連携のなかで医学犯罪が生まれていた(42頁)。石井四郎中将を総指揮官とする731部隊にも連なる悪行を犯していた。

## ② 京城帝国大学など

韓国併合〔1910年〕後、日本側は朝鮮での大学設置を禁止した。1915年にようやく専門学校規則を作り、その設置だけを許した。ところが、3・1運動〔1919年〕後、これはいけないと、1922年に改正教育令をもって大学設置を認める。1924年に京城帝国大学予科ができ、1926年に京城帝国大学のなかに法文学部と医学部が設置される。敗戦当時まで朝鮮には大学はこの京城帝国大学しかなかった（姜 在彦『日本による朝鮮支配の40年』大阪書籍、1983年、114頁）。

1928年4月3日『朝鮮日報』の報道がある。新学期であったが、在朝日本人「40万居留民に320名、2千万に僅か190名」という見出しの記事が出ていた。ここで2千万とは朝鮮人の人口である。当時、朝鮮に設置されていた高等教育機関に入学した人数を挙げておく（115頁）。

	募集人員	合格者	日本人	朝鮮人
京城帝大予科	160名	83名	:	66名
京城法学専門	70名	<u>21名</u>	:	<u>47名</u>
京城医学専門	80名	59名	:	31名
京城高等商業	80名	66名	:	14名
京城高等工業	65名	65名	:	15名
水原高等農林	65名	40名	:	24名

このなかで唯一、日本人よりも朝鮮人のほうが合格者が多いのは、下線を付した京城法学専門である。これは当時、朝鮮の裁判所では判事と検事がほとんど日本人であるのに、裁判を受けるのはほとんど朝鮮人であるから通訳裁判をしていた。この不便さを緩和するため、つまり判事・検事・弁護士のかなかに朝鮮人も入れるための方策として、京城法学専門だけは少し朝鮮人の合格者を多くしたのである（116頁）。

## ③ 植民地教育政策の本質

朝鮮人を身動きできない状況の閉じこめ、海外との交流を遮断したうえで、朝鮮人を日本人化するための同化教育が開始された。朝鮮支配のなかで教育の果たした役割は重大であった。それは日本の朝鮮支配方針と深いかわりを持ち、基本方針を同化政策に置き、朝鮮人の民族性を抹殺し、亜日本人化することに究極の目的があった（武田幸男編『朝鮮史』山川出版社、1985年、246頁）。

前掲、姜 在彦『日本による朝鮮支配の40年』は、日本帝国による「40年間にわたる日

本の侵略と支配が、今日における両国関係および在日朝鮮（韓国）人問題をみるばあいの原点だと主張している（『統一日報』1983年2月26日「書評：最低限の史実提供－『日本による朝鮮支配の40年』－」）。

本ブログ「2008.11.5」で筆者は、論文「日本は侵略国家であったのか」において、田母神が「なんと日本政府は大阪や名古屋よりも先に朝鮮や台湾に帝国大学を造っているのだ」と独断的・独善的に自慢するばかりで、その裏に潜む「植民地政策の本当の狙い」を知らず、しかも根も葉もない「素朴な印象論」を独白した田母神を批判した。ここではあらためて、田母神に不可避である根本的な間違いを具体的に実証し、歴史観の倒錯ぶりを指摘しておく。

1) 1924年中国山東省に生まれ戦後は玉川大学農学部教授を務め、みづからを在中2世と称する若槻泰雄の著作『韓国・朝鮮と日本人』（原書房、1989年）は、こう指摘する。－朝鮮教育令（明治44年勅令 第229号）は「人類としての道徳」という世界的な倫理を否定し、ただ日本帝国に「忠節な臣民」養成のみを主眼とする「国民教育」に準拠することを定めていた。朝鮮総督府は朝鮮人に対して、日本人以上に国家主義的教育、皇国臣民たる教育を徹底しようと意図したといえる（88頁）。

2) 佐野道夫『近代日本の教育と朝鮮』（社会評論社、1993年）は、植民地朝鮮において「教育制度にみる日本人・朝鮮人の差別的処遇」を、たとえば、1919～1931年の時期、6年制の師範学校として1校のみ設置された京城師範学校について、こう説明している。

「その成り立ちからも、構成からも、日本人の、それも日本人教育の教員養成が中心であった。「朝鮮人を収容する師範学校としては」、朝鮮『教育令』の上では、高等小学校卒業を入学資格とする特科師範学校のみを作り、実質は普通学校6年卒業で受け入れていた。「資格に差をつけた教員の養成という、師範学校体制の性格が第1に現れている」。「朝鮮人教育の教員を養成するのか、日本人教育の教員を養成するのか」という観点より、その教員になろうとする師範学校の生徒が朝鮮人であるか日本人であるかによって差別する二本立ての体制となっていた」（21－22頁）。

3) 鈴木讓二『日本の朝鮮統治－「一視同仁」の建前と実相－』（学術出版会、2006年）は、植民地朝鮮における京城帝国大学のような最高学府「になればなるほど内地人と朝鮮人の進学率の格差は増大している」。たとえば「1942〔昭和17〕年度の初等教育卒業者の進学率は、内地人は専門学校へ6.79%、京城帝大は2.8%（予科を含む）が進学するが、朝鮮人はそれぞれ0.77%、0.13%に過ぎない。すなわち、京城帝大に進学する朝鮮人は内地人の21.5分の1にも満たない」と指摘している（215頁）。

4) 許 粹烈〔保阪祐二訳〕『植民地朝鮮の開発と民衆－植民地近代化論、収奪論の超克－』（明石書店、2008年）から、適宜引用する。

a) 「朝鮮が日帝の植民地にならなかったとしても、自主的な近代教育がなされていた」(218頁)。

b) 「1933年以降の普通学校生徒数の増加は、この時期に本格化した鉱工業の発展と(準)戦時体制による皇国臣民の育成という日帝の教育方針の変更がもっとも重要な原因であった」(220頁)。

c) 「1920年代半ばに京城帝国大学が設立されたが、日本人と朝鮮人の2:1という割合がそのまま適用された」。「日帝時代の教育制度には、民族により大きな差別が存在していて朝鮮人が上級学校に進学することはとても難しかった。解放とともに朝鮮南部の教育に対する需要が爆発的に大きくなったのは、日帝時代の教育制度が朝鮮人が教育を受けようとする欲求を満たしていなかったことと関連がある」(225頁)。



d) 「朝鮮内では初代総督〔後藤新平のこと〕以来、朝鮮人に高等教育を受けさせないとい方針が貫徹され」、「朝鮮人と日本人が共学するばあいは、民族別クォーター制を導入して、朝鮮人の入学機会を根本的に制限した」(272頁。〔 〕内補足は筆者。後藤新平の写真は、<http://ja.wikipedia.org/wiki/後藤新平> より)。

「朝鮮内で唯一の帝国大学である京城帝大は、1942年になってから初めて理科系卒業生を輩出し、入学には民族別にクォーターが与えられていたが入学枠がたいへん少なく、また日本内の帝国大学に入学するためには高等学校を卒業せねばならないが、学制の違いにより朝鮮内には高等学校が存在しなかった」。

「したがって朝鮮内の高等学校に相当する課程を経て、日本の帝国大学に進学することはほとんど不可能であった」。「朝鮮人として日本の帝国大学に入学することは、とても特異なことではなかった」(以上、273頁)。

――田母神は、日本帝国が植民地各地に設置した教育機関、朝鮮のばあい高等教育機関の代表格である京城帝国大学に関して、「なんと日本政府は大阪や名古屋よりも先に朝鮮や台湾に帝国大学を造っている」と手放しで称賛した。しかし、その実態は、もっぱら現地に侵出した日本帝国のため、そしてその臣民のために創設された教育機関であったのだから、なにをかいわんやである。

#### ④ ま と め ―日本の、日本による、日本のための教育統治政策―

信太一郎『朝鮮の歴史と日本』(明石書店、1989年)には、以上の記述をまとめている箇所がある。



植民地朝鮮の支配は、1919年に起こされた3・1運動を契機に文化統治に変更され、「教育」を売り物のひとつにした。たしかに公立学校の数が増したが、公立の普通学校（日本人の小学校に当たる）への就学率は、1930年でも18.5%に過ぎなかった。わずか50万人の在朝日本人のための公立中学校は11校あっても、2千万人を超える朝鮮人のための高等普通学校（中学校に当たる）が26校しかなかった。朝鮮唯一の京城帝国大学は、学生が4分の3が日本人で占められていた〔←さきの見解「日本人2 対 朝鮮人1」とは異なり、より大きい比率である〕。

朝鮮民族の教育への要求に押されて「1面・1校主義」（1村に1学校）などを大見得を切ってみたものの、朝鮮総督府はこれを本気で実現しなかった。しかも「1面・1校主義」は、朝鮮人が経営する学校をつぶす目的で唱えていた。私立学校や書堂（ソダン）は、文化統治の期間に学校数で3分の1、生徒数で半分にまで減らされている。総督府の建てた公立学校では、日本とかわらぬ、いやそれ以上の天皇制教育がおこなわれていた（159頁）。

田母神「論文」は実は、論文といえるほどまともな議論をしていない。また、学術的に最低限の信憑性を置くことができるほど執筆要領での約束を守り、その手順を踏んでいるわけでもない。たとえ、この前提のもとに田母神「論文」を吟味したにせよ、その主張をあえて「論破する」だけの価値もない。それほど稚拙で恣意的な論調に満ち満ちている。筆者はそう理解しながらもわざわざ、今回における「田母神の空虚な主張」を具体的に反証するかたちで批判してみた。

【2008年11月10日 公開】

※ なお、元のブログ上では記述できる分量に制限が生じたので、ここに記述した文章とは一部異なる箇所がある。とくに「④まとめ」3段落のうち冒頭から2段落については、ブログの文章に手をくわえ少し簡略化している。